

II 平城京・京内寺院等の調査

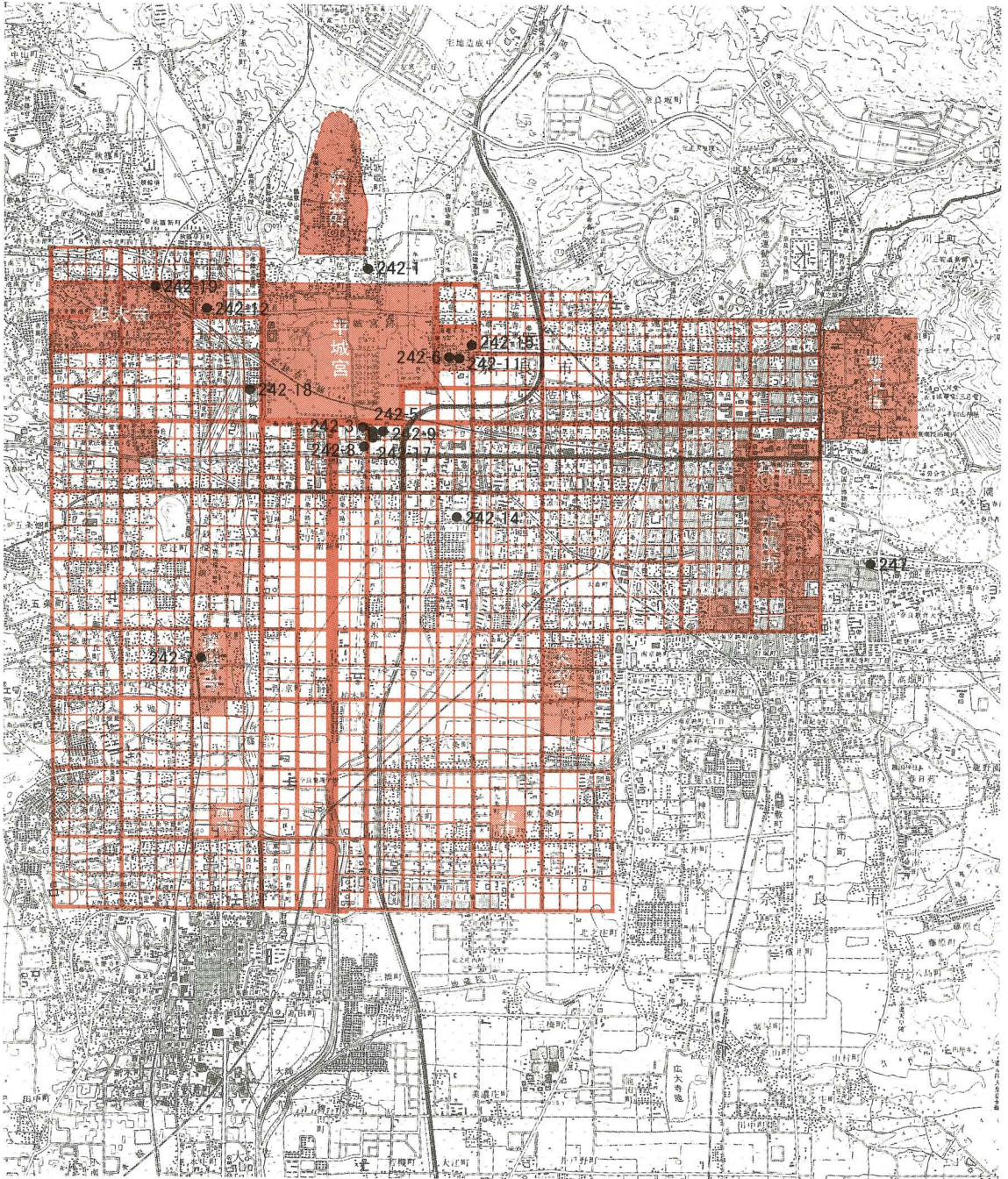


図26 1993年度平城京・京内寺院等の発掘調査位置図 1:50000

表4 1993年度平城京等発掘調査一覧（*は巻末表11に概要掲載）

調査次数	調査地区	地区名	面積(㎡)	調査期間	調査担当者	備考	頁
242-1	平城宮北方	6 A S B	27	4. 5～ 4. 7	巽 淳一郎	城田 弘二宅	64
242-3	左京三条一坊八坪	6 A F J	24	4. 20～ 4. 23	高瀬 要一	住宅建設地	65
242-5	左京三条一坊九坪	6 A F J	99	7. 5～ 7. 12	小林 謙一	共同住宅建設地	66
242-8	左京三条一坊七坪	6 A F J	350	9. 6～10. 20	小沢 毅	駐車場造成地	67
242-9	左京三条一坊九・十六坪(境)	6 A F J	18	10. 1～10. 6	小池 伸彦	中西 識宅	74
242-14	左京四条二坊十五坪(田村第)	6 A F M	120	12. 16～ 1. 10	小池 伸彦	共同住宅建設地	75
* 242-17	左京三条一坊九坪	6 A F J	10	2. 3～ 2. 4	杉山 洋	松本 實宅	102
242-18	右京二条二坊三坪	6 A G C	280	2. 8～ 3. 1	杉山 洋	簡保センター職員宿舎	78

表5 1993年度平城京内寺院等発掘調査一覧

調査次数	調査地区	地区名	面積(㎡)	調査期間	調査担当者	備考	頁
247	頭塔	6 B Z T	6	12. 9～ 3. 15	小野 健吉	復元工事	79
242-6	法華寺旧境内	6 B F O	72	7. 12～ 7. 22	藤田 盟児	梅田 矩一宅	85
242-7	薬師寺旧境内	6 B Y S	80	7. 26～ 7. 30	小沢 毅	仏像修復作業所	87
242-11	法華寺旧境内	6 B F K	36	11. 15～11. 22	内田 和伸	森田 正彦宅	90
242-12	西隆寺旧境内	6 B S R	300	11. 24～12. 27	岸本 直文	三和建设(株)	91
242-15	法華寺旧境内	6 A F B	44	1. 20～ 2. 4	森 公章	橋本 正路宅	95
242-19	西大寺旧境内	6 B S D	187	3. 8～ 3. 30	長尾 充	共同住宅建設地	97

1 平城宮北方（市庭古墳北辺部）の調査 第242-1次

市庭古墳北方の水田で実施した住宅建設に伴う調査である。当該地は、1980年実施の第126次調査で検出した市庭古墳外濠の東延長部にあたるとともに、奈良時代には大蔵省関連の遺構の存在が予想される地域である。調査面積が限られたため、主として、外濠の検出に重点を置き、南北14m、東西2mの調査区を水田面西寄りに設定した。

調査の結果、トレンチ両端に外濠の落ちを確認した。南岸の斜面には、こぶし大のバラスを葺くが、バラスに混じり奈良時代の瓦片も混じっており、第126次調査の所見通り、後の園地改修時の仕事であろう。北岸の落ちは明瞭ではなく、バラスの化粧葺きは認められなかった。今回検出の外濠は、第129次調査復原線より、やや南に下った位置にあり、より正確な外濠復原には、更に調査を進める必要がある。（巽 淳一郎）

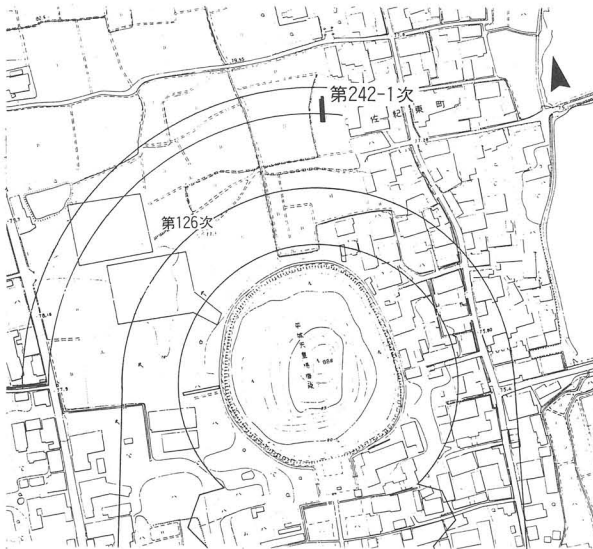


図27 第242-1次調査位置図 1:2000

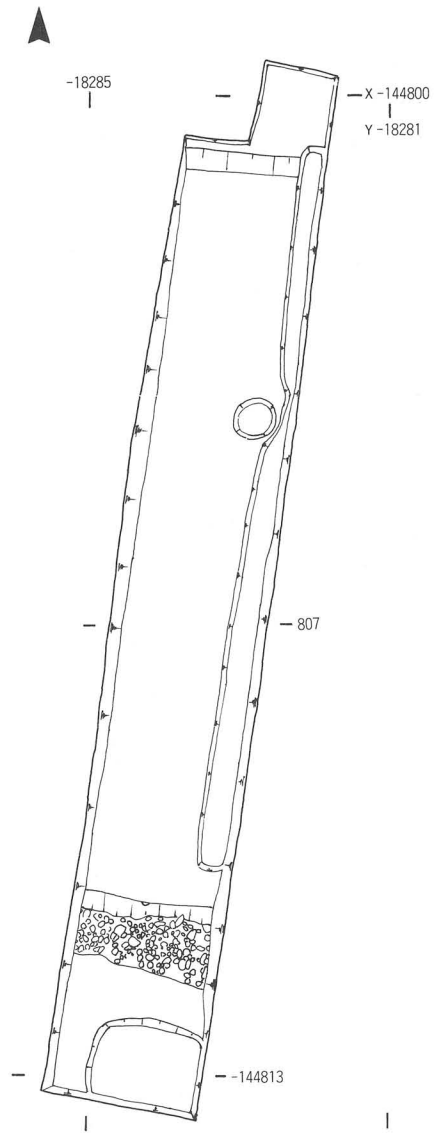


図28 第242-1次調査遺構図 1:100

2 左京三条一坊八坪の調査 第242-3次

住宅改築に伴う事前調査である。調査地は左京三条一坊八坪東北部であり、平城宮南面東門（壬生門）の前面に位置する。

従前の住宅に伴う盛土（15cm厚）の下に薄く旧耕土、床土が残り、その下が地山の遺構面となる。地山は黄褐～淡灰茶色の砂である。発掘区は東西3m、南北8mの小さなトレンチであったが、トレンチ西寄りで南北に並ぶ柱穴列を検出した。柱間は2.4m（8尺）で3間分確認した。柱掘形は一辺50～70cmの隅丸方形であるが、すでに削平を受けているとみえて、柱穴の深さは10～40cmと浅い。これが建物もしくは塀の一部なのか、あるいはそのどの部分にあたるのかなどは不明である。掘形からは古墳時代の甑の取っ手と、奈良時代前半期かと考えられる瓶のいずれも破片が出土していること、柱間、掘形の形状、方位などから平城京の遺構と考えた。そのほかの遺構としては柱穴状の小穴5個が奈良時代の可能性があるが、他はすべて新しい溝や土坑であった。

（高瀬要一）

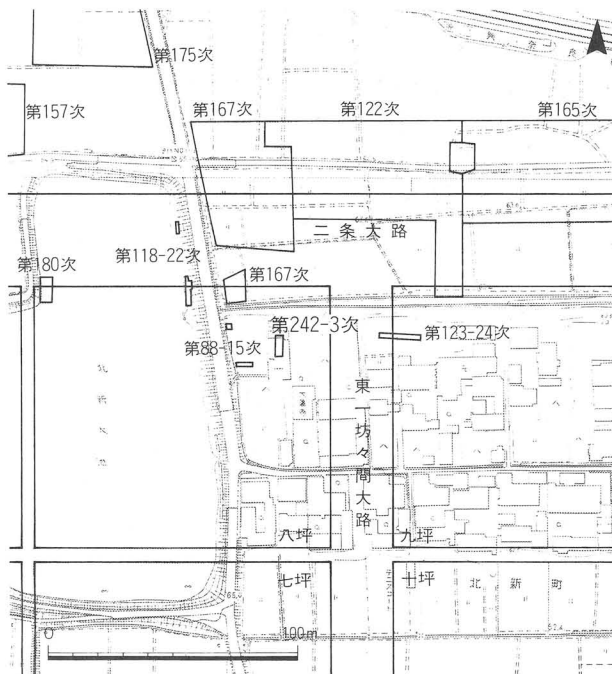


図29 第242-3次調査位置と周辺既調査区 1:3000

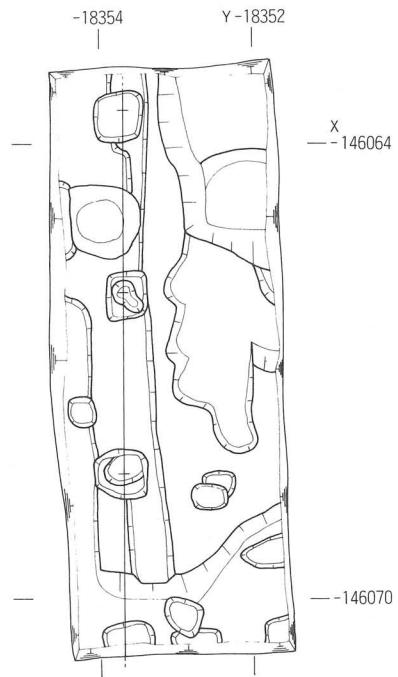


図30 第242-3次調査遺構図 1:100

3 左京三条一坊九坪の調査 第242-5次

本調査は、共同住宅建設に先立つ事前調査で、調査地は平城京左京三条一坊九坪の中央やや南にあたる。坪の東西中軸線を含め、東西15m、南北6.6mの調査区を設定した。調査地の層序は、耕土・床土の下、現地表下約20cmで黄褐色砂質土・黄灰色粘質土の遺構面となり、以下、黄灰色砂質土、黄白色粘土と続く。

調査の結果、奈良時代の柱掘形数個と土坑、調査区北東部に広がる自然流路等を検出した。

掘立柱建物SB6070は、調査区外へ続くと推定される梁間2間(3.5m)の小規模な東西棟。土坑SK6075は、調査区西南隅で検出したもので、底から31×23cm、厚さ7cmの埴が出土した。掘立柱建物の北東隅柱になる可能性も考えられる。円形の土坑SK6063は径約2m、深さ約0.8m。自然流路SD6065は南岸を検出。湧水が著しいので一部のみ掘り下げ、深さ1.5mを確認した。

遺物としては、掘立柱建物の柱掘形および抜取りから奈良時代の土師器・須恵器、自然流路SD6065からは軒瓦3点(軒丸瓦6313I、軒平瓦6641C・6663C)、土坑SK6073からは、轆轤挽の小形の木皿が出土している。その他、黄灰色砂質土から石鏃が、床土から石核が出土している。石鏃(図32)は無茎凹基式で、両面加工している。重さ約1g。石核は大形の剝片を素材とし、打面調整なしに、2枚の横長剝片を剝離している。材質はいずれもサヌカイトである。(小林謙一)

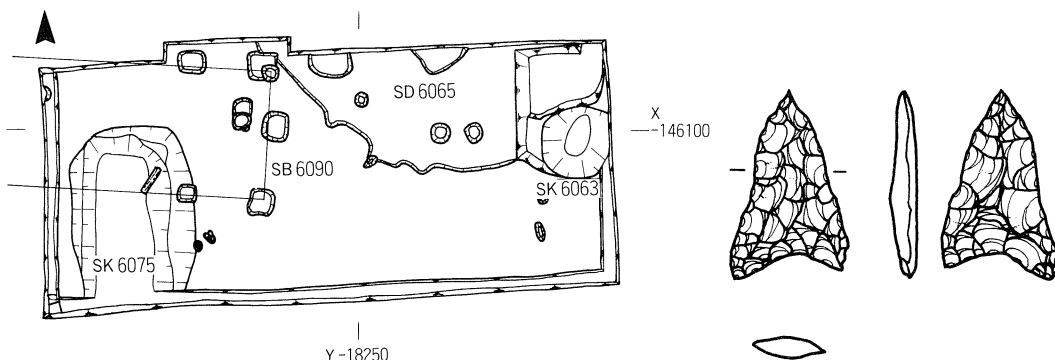


図31 第242-5次調査遺構図 1:200

図32 石鏃 1:1

4 左京三条一坊七坪の調査 第242-8次

1 はじめに

駐車場の造成に伴い、左京三条一坊七坪の東寄りの部分で、事前の発掘調査を実施した。1991年度に行った第231次調査地の、市道を隔てて東側にあたる。当該坪における過去の調査としては、この第231次調査（2200㎡、奈良国立文化財研究所『平城京左京三条一坊七坪発掘調査報告』1993年）のほか、第234-16次調査（30㎡）、奈良市第38次調査（155㎡、奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和58年度』1984年、11～14頁）がある。

『平城京左京三条一坊七坪発掘調査報告』では、遺構・遺物の状況や京内での位置、史料との対比から、この地を宮外官衙と想定し、大学寮の可能性が高いと結論づけた。報告によれば、遺構の大半は奈良時代後半に属しており、A・Bの2期に分けられるが、それぞれSB5758とSB5753を中心的建物とする。ただし、この両建物は、東端が未検出のため、桁行の間数は不明であった。そこで今回は、

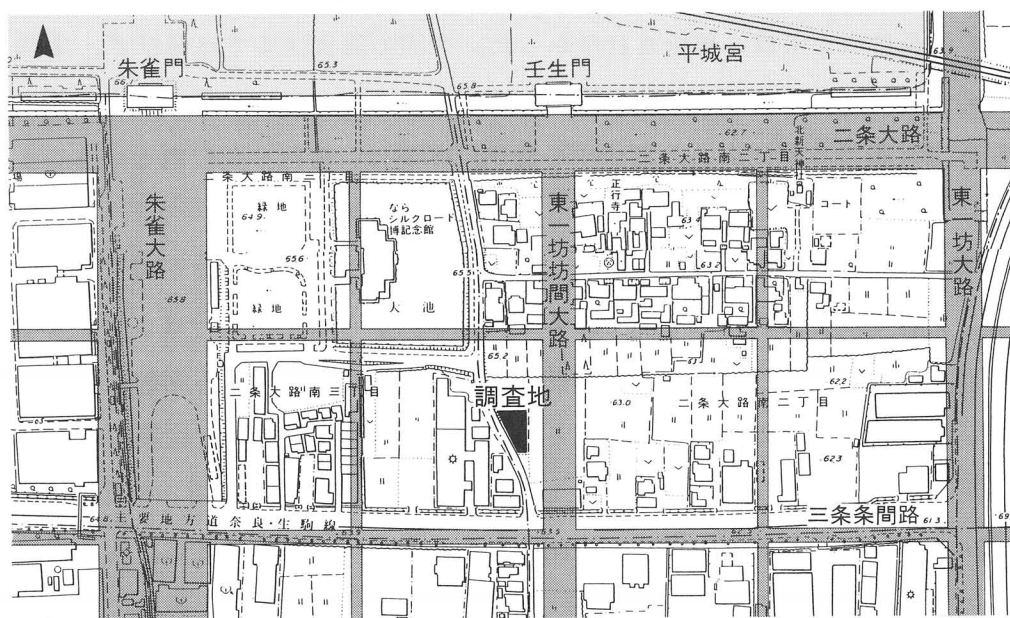


図33 第242-8次調査位置図 1:5000

両者の規模を復元するための資料を得るべく、東への延長部にあたる造成予定地の南端に調査区を設定することにした。発掘面積は350㎡である。調査地は休耕田であり、水田耕土と床土を重機により除去したのち、以下を人力掘削とした。

層 序 水田耕土は20cm程度の厚さがあり、その下は、部分的に旧水田耕土をはさんで、床土がひろがる。この直下が地山となる部分もあるが、間に厚さ5～10cmの灰褐色ないし灰黄褐色砂質土をはさむ場合が多い。これは奈良時代の土器片を多量に含む包含層であり、平城京廃絶後の水田耕土と考えられる。地山の様相は必ずしも一定でないが、ほぼ上から順に、黄灰色粘土、灰白色～灰褐色砂、茶灰色粘土、淡黄灰色粘土～微砂、暗灰色粘土～微砂、淡灰色微砂、灰色粗砂の順で堆積している。いずれも、ほぼ均質の河川堆積物である。水田耕土上面の標高は、62.5m、遺構面の標高は、62.2m前後であった。

2 遺 構

掘立柱建物5棟、掘立柱塀4条、井戸1基、素掘り溝数条、土坑数十基、河川旧流路1条を検出した。掘立柱建物は、おしなべて小規模であり、基本的に雑舎的な性格が想定される。なお、当初検出を意図した、第231次調査のSB5753・SB5758の延長については、確認されなかった。今回の調査区までは伸びず、中間の市道の下で終わっているものと判断してよい。したがって、A期の中心建物であるSB5758は桁行5間以内、B期の中心建物SB5753は、桁行9間以内ということになる。前者は、おそらく廂を含めて5間×3間の規模であろう。

SB6085 調査区の北端中央部で検出した南北棟建物である。北妻が調査区外に伸びる。桁行2間以上、梁間2間であるが、他の例からみて、桁行は3間となる可能性が高い。柱間は、ともに6尺等間である。柱穴にはいずれも明瞭な柱痕跡が残り、柱根をとどめるものも見られる。柱径は、約15cmである。柱掘形が、後述する河川旧流路SD6100の埋土を切っており、奈良時代後半～末頃と推定される。

SB6095 調査区の西北部、SB6085の南西にある小規模な南北棟建物。西北隅の柱穴については、検出できなかったが、削平のため消失したものと考えておく。桁行2間（12尺＝6尺×2）、梁間1間（8尺）と復元される。

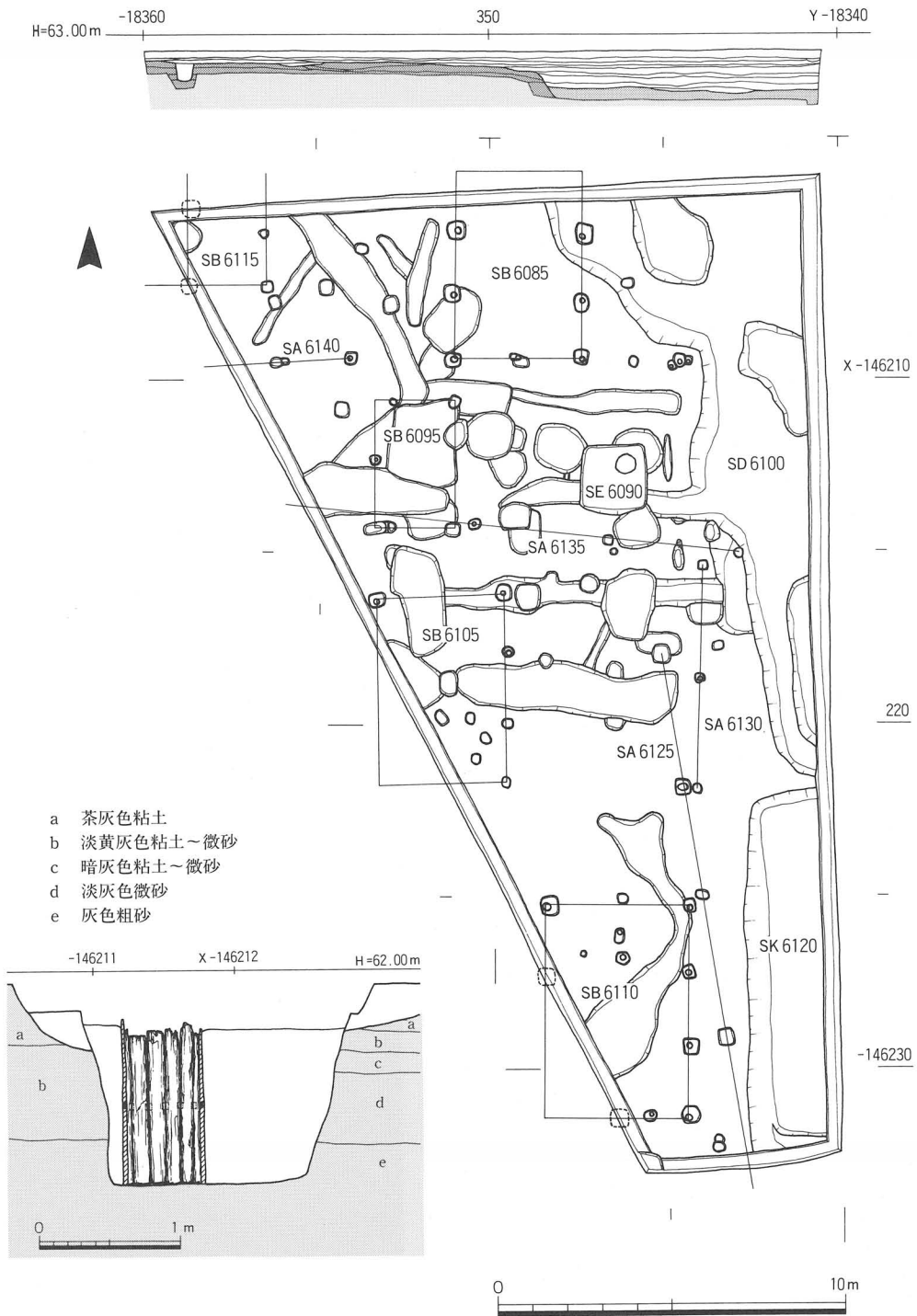


図34 第242-8次調査 遺構図(1:200)及びSE6090実測図(1:50)

SB6105 調査区西端中央部、SB6095の南で検出した南北棟建物である。桁行3間（18尺＝6尺×3）、梁間2間（12尺＝6尺×2）で、SB6085と同一の規模であろう。柱掘形の大きさにばらつきがあるが、柱痕跡の認められるものでは、柱径12～15cmとほぼ一定している。

SB6110 調査区の南端で確認した南北棟建物である。桁行3間（21尺＝7尺×3）、梁間2間（14尺＝7尺×2）と、柱間数ではSB6085・SB6105と同じだが、柱間寸法がひとまわり大きい。大半が柱痕跡をとどめており、柱径は14～18cmである。

SB6115 調査区の西北隅で、建物の東南隅部分を確認した。西側の2柱穴が東側の柱穴よりかなり大きいことから、前者を身舎柱（入側柱）、後者を廂柱（側柱）とする南北棟と推定しておく。桁行柱間、廂の出ともに8尺。

SA6125 調査区東南部で検出した南北塀。柱穴4個を確認したが、まだ南側にのびる可能性がある。方位は、北でかなり西へ振れる。柱間は、北から13尺、11尺、14尺と一定しない。



図35 第242-8次調査区全景 北から



図36 第242-8次調査区全景 南から

SA6130 調査区中央部東寄りの部分で検出した南北塀である。小型の柱穴3個を確認したが、さらに北側にのびていた可能性がある。柱間は11尺等間。

SA6135 調査区の中ほどで検出した東西塀。柱穴3個を確認した。東西になお延長を想定しうる。柱間は13尺等間である。



図37 井戸SE6090 南西から

SA6140 調査区西北部で検出した東西塀。柱穴2個を確認したが、さらに西側にのびていたものと思われる。

SE6090 調査区の中ほどで検出した井戸。一辺約2.0mの正方形に近い掘形の、東北に偏して井戸枠をおく。井戸枠は、11枚の板材をつないだ内径約55cmの円形縦板組みである。厚さは、底部付近で約4cmあり、底から約55cm上の部分を太柄で連結する。太柄は、5.5×4.5×1.8cm程度の直方体である。掘形の埋土は、地山各層の土がブロック状に混じるが、井戸枠内は、暗灰色粘土に限られる。後者は、井戸廃絶後の自然堆積である。この最下部から、萬年通寶1点が出土した。

SK6120 調査区の東南部で検出した、深さ約40cmの長方形の土坑。確認したのは、南北11m、東西2.5mほどであるが、さらに東へのびる。埋土は、奈良時代の土器を多量に含む暗茶褐色砂質土である。塵芥処理用の土坑であろう。出土遺物からみて、奈良時代後半のもの。

SD6100 調査区の東部で検出した河川の旧流路である。北西から南東に向けて流れたものである。遺構面から1.25m下まで掘削したが、まだ底面に達しなかった。ただし、遺構面の下約0.8mからは、人工遺物を全く含まない灰色砂と灰黒色粘土の互層（自然堆積）となり、これより上とは埋土の状況を著しく異にする。したがって、この面が奈良時代におけるベースであったと考えられる。その上の埋土は、下から順に灰黒色粘質土、暗灰色粘質土、暗茶褐色砂質土、明茶褐色砂

質土となるが、いずれも奈良時代の土器や瓦を含む。とくに暗茶褐色砂質土は、多量の遺物を含んでおり、埋土の状況もSK6120に近い。おそらく旧流路を塵芥処理に利用したのであろう。出土土器が平城宮土器Ⅳ・Ⅴを主体とすることから、埋まったのは奈良時代後半～末頃と考えられるが、SB6085よりは古い。

3 遺物

瓦埴、土器、土馬、銭貨などが出土しており、ほとんどが奈良時代のものに限られる。瓦埴については表に示すとおりである。軒瓦は、久米瓦窯産の藤原宮式軒平瓦6561Aをのぞき、いずれも奈良時代中葉～後半に属する。6225Cと6711AaはSK6120から、6721C・6721Haは、SD6100下部の暗灰色粘質土から出土した。6561Aは包含層からの出土。6561Aは段顎AⅠ、6721Cは曲線顎Ⅱ、6721Haは直線顎である。刻印瓦「国」は、小型の方形の刻印を平瓦の狭端面に押捺しており、文字は瓦の側で陽刻となる。ただし、くにながまえの中は、「玉」ではなく「王」。井戸SE6090の枠内から出土した。

施釉瓦埴は5点出土しているが、いずれも平瓦である。緑釉・褐釉・白釉（透明釉）の全てが認められるものが2点、緑釉と褐釉、緑釉と白釉が確認できるものが各1点ある。もう1点は小片で、緑釉のみが残る。ともに、本来は三彩瓦であろう。全て凹面に施釉されているが、うち2点は（狭）端面にも緑釉がかけられている。SK6120とSD6100の暗茶褐色砂質土から、1点ずつ出土した以外は、包含層からの出土である。

土器は、整理用の木箱（約70×45×11cm）で26箱分が出土した。河川SD6100とSK6120の暗茶褐色砂質土からの出土量が多い。時期の判別が可能なものは、大半が平城宮土器Ⅲ～Ⅴに属しており、とくに平城宮土器Ⅳ・Ⅴを主体とす

表6 第242-8次調査出土瓦集計表

軒丸瓦			軒平瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数
6225	C	1	6561	A	1
6316	C	2	6711	Aa	1
型式不明		1	6721	C	1
				Ha	1
軒丸瓦計			軒平瓦計		
4			4		
刻印瓦「国」			施釉瓦		
1			5		
埴		丸瓦	平瓦		
重量	9.6kg	重量	54.0kg	重量	200.1kg
点数	6	点数	532	点数	1,479

る。土師器には、杯、高杯、椀、皿、盤、壺、甕、竈などがあり、そのほか製塩土器も目を引く。須恵器には、杯、高杯、椀、鉢、皿、盤、壺、甕、円面硯、風字硯などがある。硯2点は、ともにSD6100からの出土。須恵器のうち、杯B蓋の一部は、灯明皿として使用されており、杯AⅣの中には、漆のパレットとして用いられたものがある。また壺・甕の中にも、漆の付着する例が認められる。風字硯と甕の一部は猿投窯産、杯と皿の一部は、美濃および播磨産である。

墨書土器は、8点出土している。杯Aあるいは杯Bの蓋や身の外面に書かれたもので、うち7点がSD6100からの出土。文字は、「在」「伊□」「本」「政□」「山田」「□[河カ]」「郎」であり、これ以外に判読できないものが1点ある。

このほか、土製品としては、土馬が21片出土した。すべてSK6120からの出土で、遺構の性格を考える上で指標となるものであろう。また金属製品としては、前述のように、SE6090井戸枠内から萬年通寶（760年初鑄）1点が出土している。

一方、量的には少ないが、奈良時代以前に溯る遺物も散見される。古墳時代の須恵器の杯や土師器の高杯・壺などの土器類と、形象埴輪である。原位置を保つものはなく、いずれも二次的に移動しているが、平城京以前の周辺地域の様相をうかがわせる遺物といえよう。

4 ま と め

今回の調査では、残念ながら、当該坪の性格を特定できるだけの資料は得られなかった。しかし、全体に建物の密度が低く、大型の建物が少ないことなど、市道を隔てて西接する第231次調査区の様相と共通する要素が確実に認められる。また、これらの建物は奈良時代後半を主体としており、その点でも両者はほぼ一致するとみてよい。つまり、両調査区を含んで、左京三条一坊七坪が、一体として機能していたことがうかがえる。そして、それは建物の様相や京内での位置を勘案すれば、大学寮と確定はできないまでも、やはり貴族の邸宅ではなく、宮外官衙的なものと想定されるのである。今次調査区の建物が、いずれも雑舎的であるのは、敷地の東端に近いという位置によるものであろうが、墨書土器が比較的多く出土しているのは、当該坪の性格と関係するものかもしれない。（小沢 毅）

5 左京三条一坊九・十六坪（境）の調査 第242-9次

本調査は、奈良市二条大路南二丁目257-3他で実施した、住宅建築に伴う調査である。調査地は北新天神社のすぐ南西に位置し、左京三条一坊九坪と十六坪の坪境中央部にあたる。調査では、坪境小路（東一坊々間東小路）想定地に、東西5m、南北2.4mの調査区を設定した。調査期間は1993年10月1日から10月6日である。

調査区の土層は上から造成土（10cm厚）、耕土（25cm厚）、床土（5cm厚）、黒褐色砂質土（地山）の順で堆積し、遺構は黒褐色砂質土層上面（標高61.9m前後）で検出した。主な遺構には、南北溝1条、東西溝1条、土坑3基などがある。このうち南北溝SD6155は、幅1.8m、深さ30cmで、埋土は上層（暗灰色砂質土）と下層（橙褐色砂混じり粘質土）に分れる。SD6155は、溝心の座標が $X = -146096.00$ 、 $Y = -18190.20$ であり、第230次調査で検出された、東一坊々間東小路西側溝SD32の溝心座標値などから見て、同じ溝と考えられる。SD32は後に溝幅を狭くして西へずらしていることが判明しているが、本調査ではそうした事実は認められなかった。SD6155の下層から、奈良時代中頃の須恵器杯B蓋・甕、土師器等が出土した。（小池伸彦）

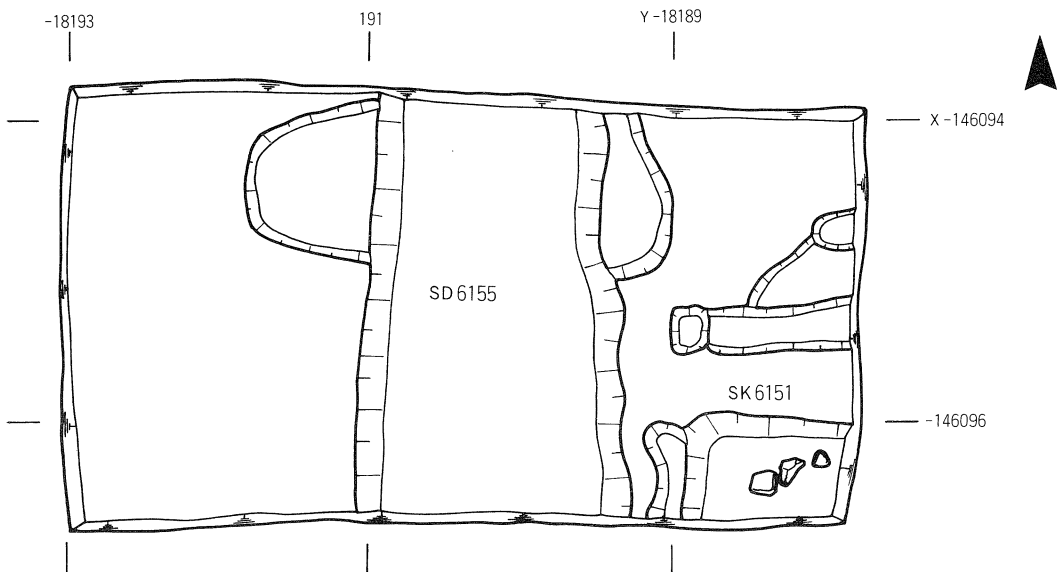


図38 第242-9次調査遺構図 1:50

6 左京四條二坊十五坪の調査 第242-14次

1 はじめに

本調査は、奈良市四條大路一丁目754-1において実施した、共同住宅建設に伴う事前調査である。調査地は、奈良市立三笠中学校の約100m西方に位置し、藤原仲麻呂の邸宅田村第と推定される、左京四條二坊十五坪の西北隅にあたる。この坪は、これまで3次にわたる調査が実施されている。調査にあたり、住宅建築面積にほぼ匹敵する東西約20m、南北約6mの調査区を設定した。調査期間は1993年12月16日から1994年1月10日である。

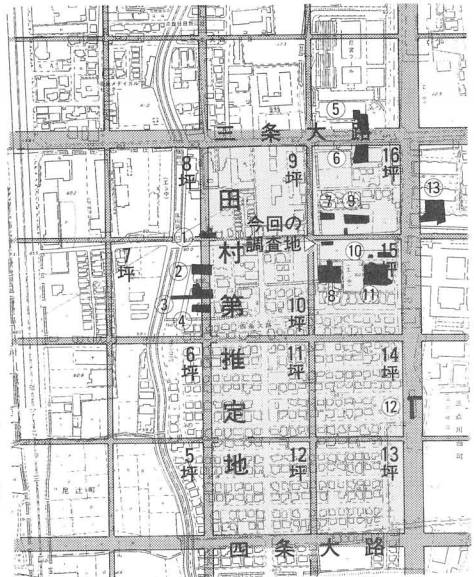


図39 田村第推定地近辺の調査 1:10000

層序は上から造成土（80cm厚）、耕土（20cm厚）、床土（10cm厚）、灰黄～橙灰色砂質土（35cm厚）、暗灰色粘質土（15cm厚）、暗黄褐色粘質土（整地土、20cm厚）、濃褐色混じり灰黄色粘土（地山）の順である。整地土は奈良時代のものであるが、かなり削平を受けている。遺構は整地土上面（標高58.9m）で検出した。

- 1 奈良市教育委員会、第133次調査、『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』昭和62年度、1988年。
 - 2 奈良市教育委員会、1984年調査、『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和59年度、1985年。
 - 3 奈良市教育委員会、1984年調査、『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和58年度、1984年。
 - 4 奈良市教育委員会、1983年調査、『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和58年度、1984年。
 - 5 檀原考古学研究所、1975年調査、『平城京左京三條二坊十三坪』、1975年。
 - 6 奈良市教育委員会、第136次調査、『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』昭和62年度、1988年。
 - 7 奈良市教育委員会、1983年調査、『奈良市埋蔵文化財調査報告書』昭和58年度、1984年。
 - 8 奈良国立文化財研究所、第145次調査、『平城京左京四條二坊十五坪発掘報告』、1985年。
 - 9 奈良国立文化財研究所、第223-20次調査、『1991年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』、1992年。
 - 10 奈良国立文化財研究所、第191-3次調査、『昭和63年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』、1989年。
 - 11 奈良国立文化財研究所、第156-8次調査、『平城京左京四條二坊十五坪発掘報告』、1985年。
 - 12 奈良国立文化財研究所、第123-6次調査、1980年調査。
 - 13 奈良国立文化財研究所、第105次調査、『昭和52年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』、1978年。
- ※数字は図39の数字に対応する。

2 遺 構

検出した遺構には、掘建柱建物3棟、土坑13基、南北溝6条、耕作溝数条などがある。十五坪の西北隅に近い調査区ではあるが、条坊関連遺構はすべて調査区外にある。以下、奈良時代の主な遺構について述べる。

SB6170 調査区中央部で検出。桁行2間以上あり、梁間が2間と考えられる掘立柱南北棟建物。柱掘形は一辺が約90cm、深さ40cmである。桁行柱間寸法は8尺等間、妻柱は調査区外のため未検出であるが、梁間柱間寸法も8尺等間であろう。SK6180より新しく、出土土器からは奈良時代後半～末に比定できる。

今回の調査区の南方約18mのところでは実施された第145次調査では、大型の礎石建物SB2200・2210を検出しているが、SB6170は南北棟SB2210の東側柱筋とも、また東西棟SB2200の西妻柱筋とも柱筋を揃えない。

SK6166・SK6171 調査区東北部で検出した小規模な土坑。一辺約80cm、深さ約10cm。土師器、須恵器が出土したが、小片のため詳細な時期比定は困難である。

SK6177 調査区中央部で検出した方形小土坑。一辺約50cm、深さ約10cm。SK6180より新しい。土師器小片が出土した。

SK6180 調査区中央部南縁において検出した円形土坑。土坑の南半部は調査区外に延びる。直径2.2m、深さ40cmあり、播鉢状を呈する。埋土は上層（橙褐色粘質土）と下層（暗灰褐色粘質土）に分れる。下層から、平城宮土器Ⅱの土師器、須恵器が出土したが、その中に特異な形態の土師器が含まれており、注目できる。

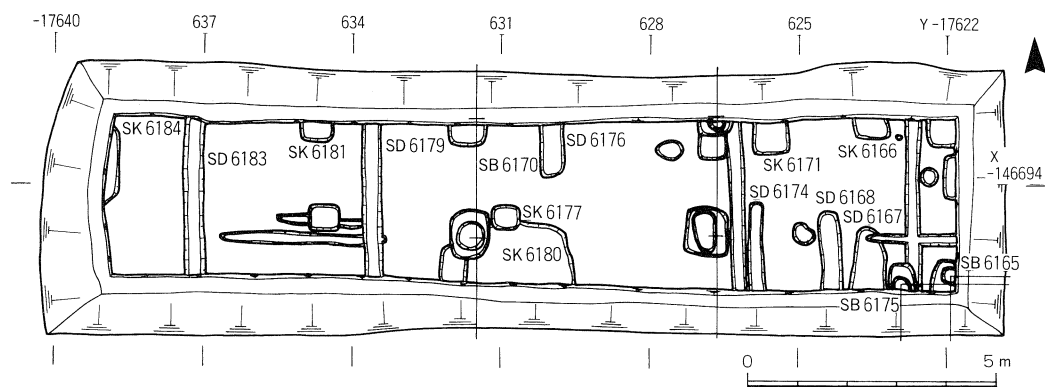


図40 第242-14次調査遺構図 1:150

SD6176 調査区中央部北縁で検出した南北溝。大部分は調査区外に延びる。幅約40cm、深さ約10cm。明灰褐色砂混じり粘質の埋土中からは、須恵器杯B蓋が出土した。須恵器は小片のため詳細な時期は不明。

SD6179・SD6183 調査区西半部で検出した南北溝。両溝の心々間距離は3.6mである。幅35～40cm、深さ15cmあり、埋土は灰黄色砂混じり粘質土である。埋土中から須恵器、土師器が出土したが、詳細な時期は不明である。

3 遺物

出土遺物には、奈良時代の土師器、須恵器、瓦などがあり、その他に瓦器少量がある。数量は、土器が整理木箱2箱分、軒丸瓦（6282G）が1点、丸瓦片が1.3kg、平瓦片が8.8kgである。

SK6180からは、平城宮土器Ⅱの土師器・須恵器（図41）が出土した。土師器には杯A・B、壺蓋、甕があり、須恵器には杯B（3）・B蓋（1）、碗A（2）、壺、甕がある。このうち4は特異な形態の土師器で、平城京内では初めての出土例であろう。平面は長楕円形を呈し、扁平な器形である。頂部外面は灰黄色、内面は赤褐色を呈し、側面に小黑斑が認められる。整形は型作りで、型抜きの際に生じた歪みが見られる。内面はナデ付けている。口縁部の長径12.7cm、短径8.2cm、器高1.9cm、器壁の厚さ2～4mm。胎土中に長石の微小砂粒を含む。完形品。

4 まとめ

今回の調査によっても、十五坪を藤原仲麻呂の田村第跡とする証左は得られなかった。また、第145次調査では、宅地内を東西に区画する南北塀SA2240（A期）を検出しているが、これは今回の調査区までは延びていないことが明らかとなった。従って、奈良時代初頭この宅地は、今回調査区と第145次調査区との間で、さらに南北に区画されていた可能性がある。（小池伸彦）

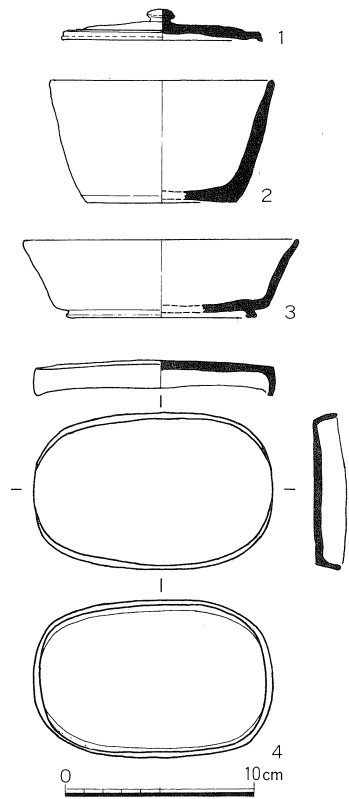


図41 SK6180出土土器 1:4

7 右京二条二坊三坪の調査 第242-18次

本調査は、奈良市二条町3-9-1において、従業員宿舎の改築工事に伴う事前調査として行った。調査地の西側には、秋篠川が流れ、秋篠川の旧流路が調査区の西半を占めるものと推定された。そのため幅7m、長さ40mの細長い調査区を東西に設定した。

検出した遺構は、溝2条、土壇4基、遺物を含んだ包含層の落ち込みなどである。

溝2条は、いずれも素掘りの東西溝である。SD2500は幅約1.5m、深さ約50cm。18m分を検出した。調査区なかほどで終端を検出したが、さらに西へ浅い溝が続いていた痕跡があり、秋篠川旧流路につながっていた可能性もある。SD2501はSD2500の南を平行して流れ、調査区東端近くで南へ曲がる。幅約1.0m、深さ約0.2mであるが、中央が長さ約9mにわたり、幅2.4m、深さ0.6mに広がる。SD2506は秋篠川の旧流路。灰色砂と青灰色粘土が交互に厚く堆積する。調査区内で少なくとも3回の川岸の変遷が認められる。SX2505は旧流路に堆積した遺物包含層。土器・瓦などの遺物が豊富に出土した。

遺物はSD2501とSX2505から主に出土した。

瓦では奈良時代の軒平瓦の小片2点のほか、中世の軒瓦がまとまって出土した。巴文軒平瓦3点、唐草文軒平瓦4点、鬼瓦3点、面戸瓦・隅木蓋各1点がある。

土器では、土師器小皿、瓦器、羽釜、須恵器播鉢、常滑壺、黒釉陶器などが出土した。瓦器・羽釜などは13世紀後半代と考えられる。

(杉山 洋)

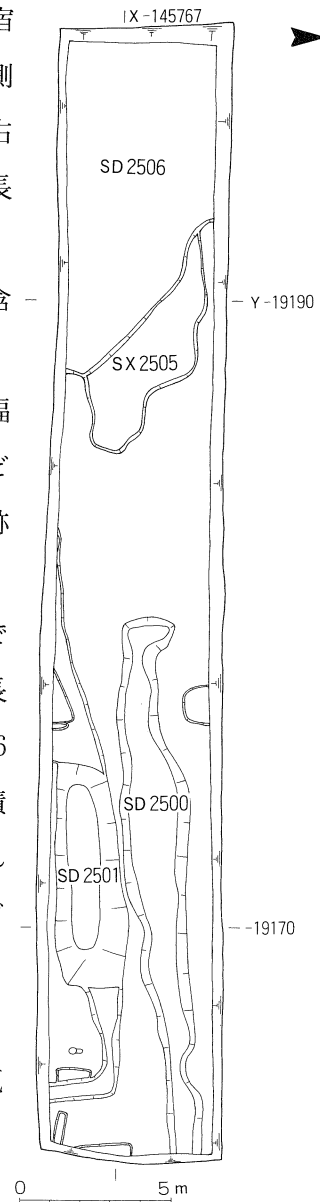


図42 第242-18次調査遺構図1:250

8 頭塔の調査 第247次

1 はじめに

奈良県教育委員会が行う頭塔の復原整備に伴う調査。これまで、第181次（北東部4分の1・1986年度）、第199次（北西部4分の1・1988年度）、第232次（東面中央部基壇から頂部までの断割・1991年度）、第237次（東面北半部第一段・第二段の断割・1992年度）の4次にわたる調査を実施し、頭塔の規模・構造・変遷等を明らかにしてきた。

今年度の調査は、北面第一段・第二段の石積解体修理に伴うもので、1994年1月24日から解体を開始し、3月15日に解体及び発掘調査を終了した。発掘調査区としては、北面中央石仏の西側（中央調査区）と同西端石仏の東側（西調査区）に2ヶ所設定し（図44）、平面検出と積み土の断面調査を行った。

2 遺 構

下層石積と石敷 これまでの一連の調査で、現在外観をあらわしている頭塔（上層頭塔）の内部に石積（下層石積）が存在し、それに伴う基壇上面の舗装が石敷（Ⅰ期石敷）と小礫敷（Ⅱ期小礫敷）の2時期にわかれることが判明しているが、今回の北面中央、西両調査区でも同様に下層石積とⅠ期石敷・Ⅱ期小礫敷を検出した（図45～47）。

石積の残存高は中央調査区・西調査区とも約90cmであった。下層石積東面では基部が階段状に施工されていたが、今回検出した下層石積北面ではそうした施工は行われていなかった。

下層石積北側のⅠ期石敷は、おもに30～40cm大の偏平な石を用いた幅1.95m前



図43 第247次調査位置図 1:5000

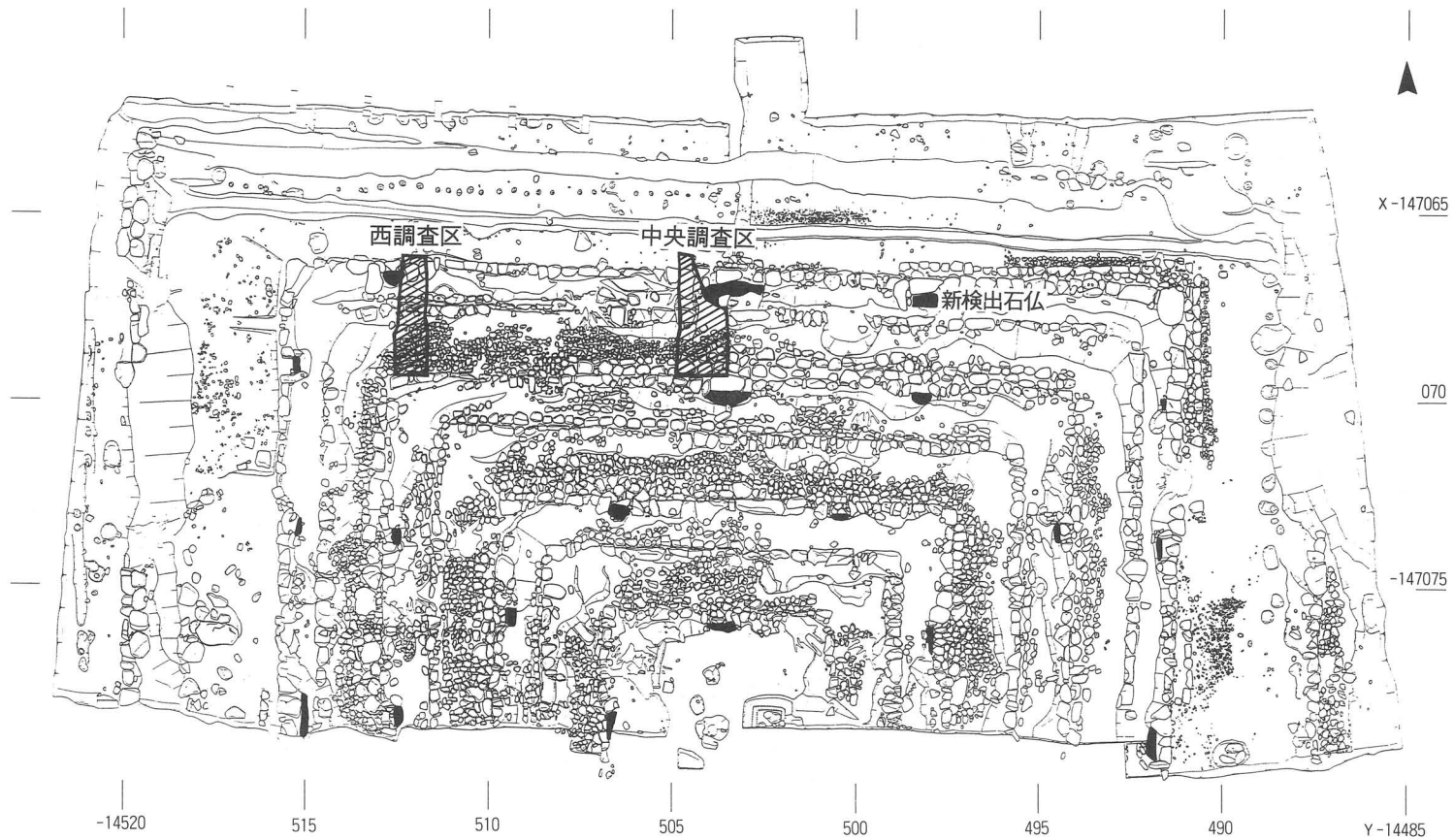


図44 第247次発掘調査区及び新検出石仏位置図 1 : 200

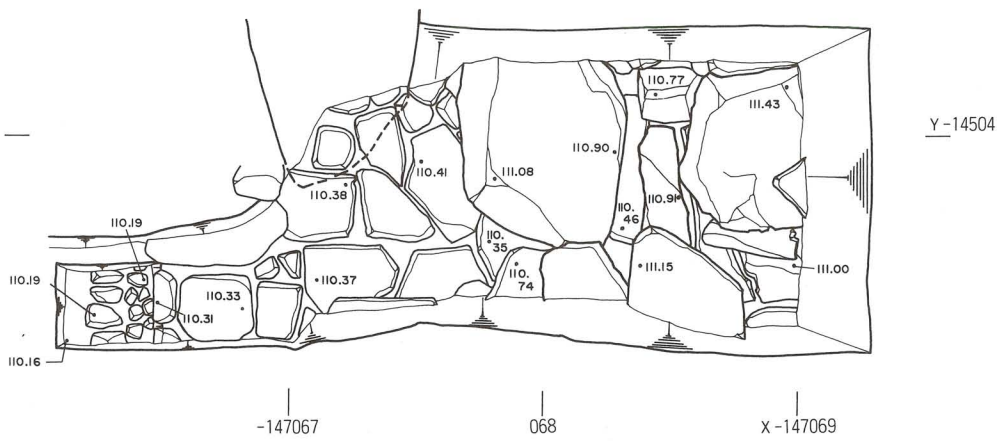
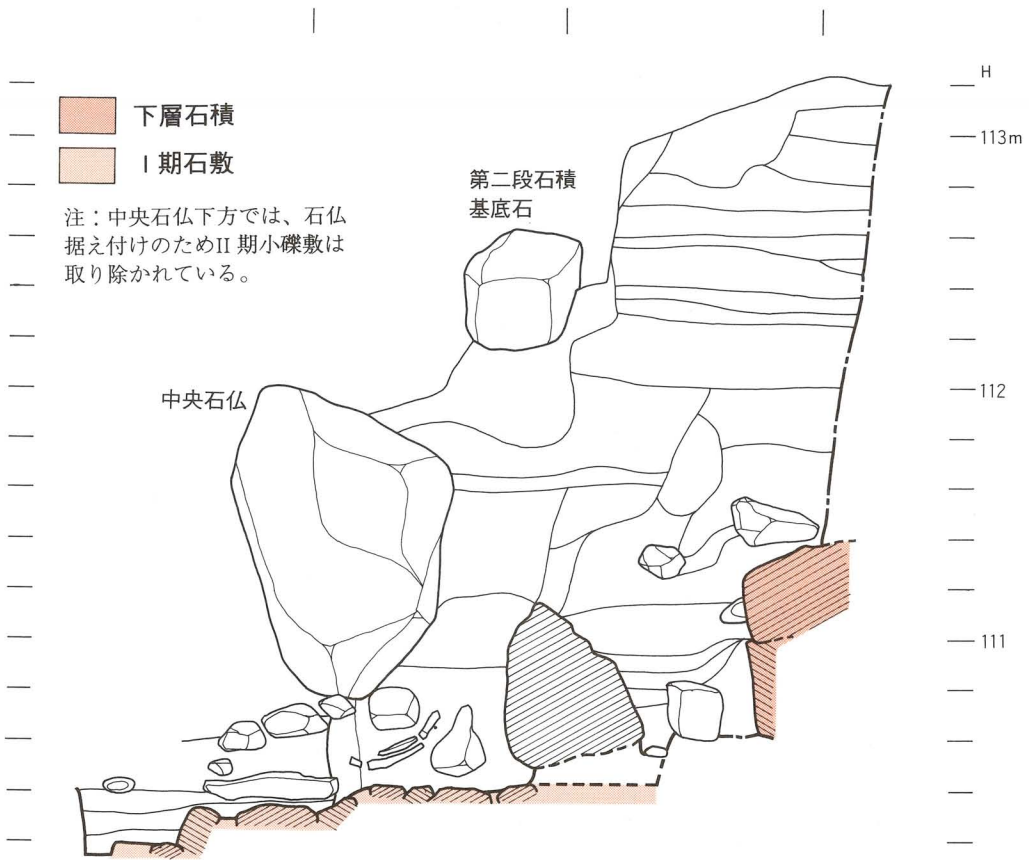


図45 中央調査区遺構図及び土層断面図 1 : 30

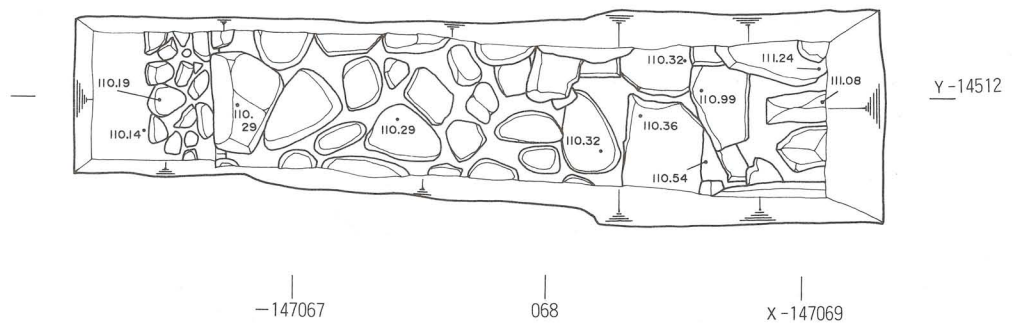
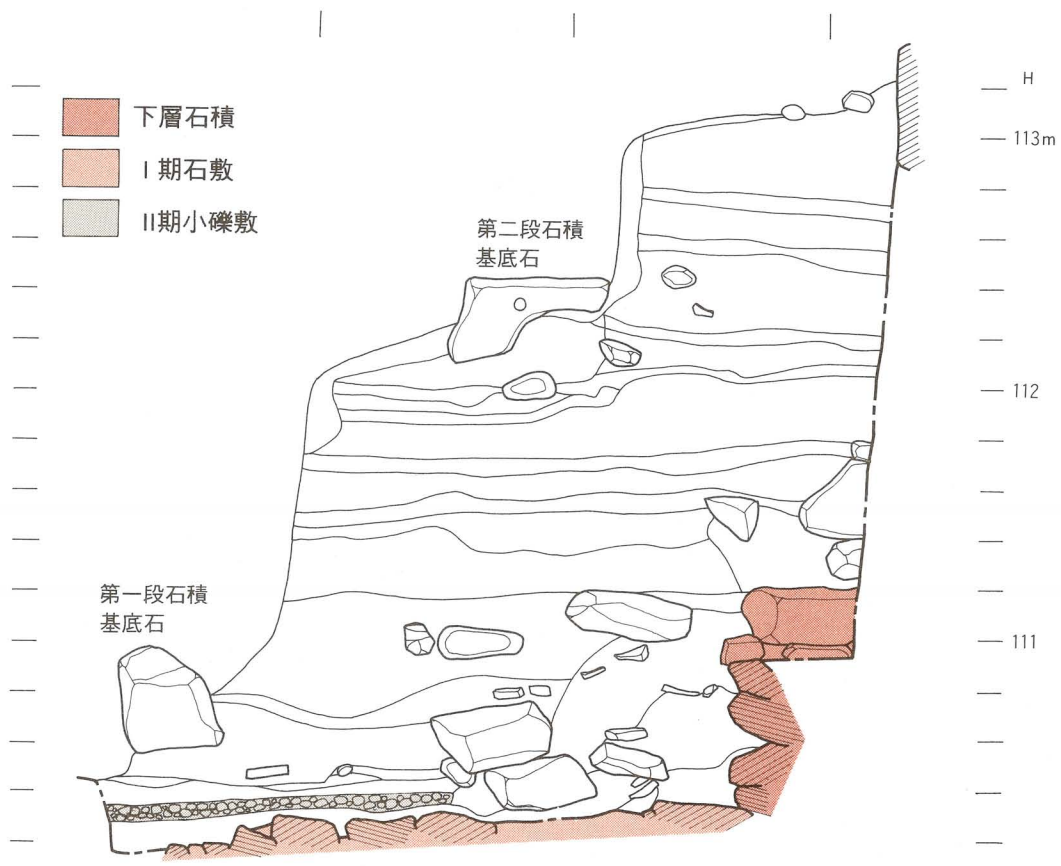


図46 西調査区遺構図及び土層断面図 1 : 30

後の石敷と、その外側の約10cm低い位置に巡る、こぶし大の石による幅約25cmの外周石敷からなる。このⅠ期石敷は、内（南）から外（北）へ緩い勾配をもつ。

また、これらの石敷の上面に土をかぶせて施工した5cm内外の小礫敷（Ⅱ期小礫敷）は、下層石積の基部まで到達しておらず、東面での状況と同様であった。Ⅱ期小礫敷がはじめから下層石積と連続していなかったのか、あるいは上層頭塔築造時にかく乱されたのかは不明であるが、東面・北面とも下層石積基部から約1.0mのところまで途切れていることから、前者の可能性がやや大きいかもしれない。

なお、中央調査区で予想された仏龕は、下層石積前面を検出したのが調査区の最奥（南）部付近であったため、有無を確認できなかった。

上層頭塔積み土 基本的には灰褐色粘質土と赤褐色粘土（小砂礫混じり）とを交互に積んだ版築である。ところどころに石や瓦が入っている。なお、中央調査区の第二段積み土層から東大寺のものと同範の軒平瓦2点が出土した。

石 仏 北面第一段中央石仏から、約5.1m東で新たに石仏を検出した（図48）。これまで上層頭塔全体で25体の石仏が確認されており、これが26体目となった。石の大きさは幅65cm、高さ110cm以上、厚さ36cmで、石積の内側に深く埋め込まれている。石材上部に浮き彫りにされた像高34cmの立像は、かなり摩滅しているが、頭光が明瞭であること及び袈裟のひだと見られる凹凸があることなどの特徴から、如来像と推定できる。

なお、中央石仏を中心にこの新検出石仏と対称の位置、同じく西端石仏と対称の位置周辺を精査したが、明瞭な抜取痕跡は確認できなかった。このことは、それらの位置の石仏が深く埋め込まれたもので

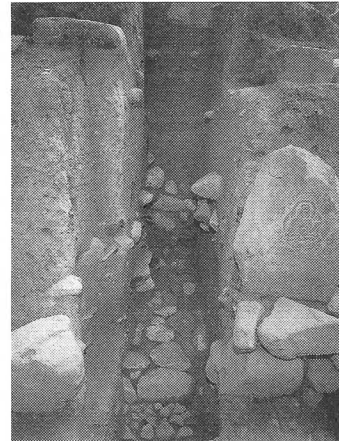


図47 西調査区

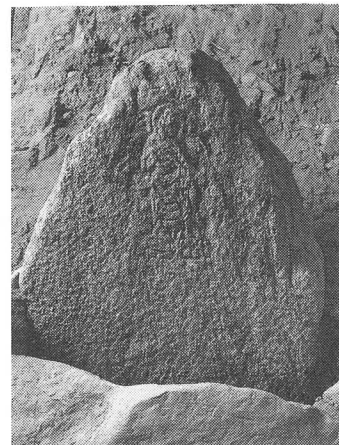


図48 新検出の石仏

はなく、それゆえに容易に持ち出されたことを示すものと推測できる。

上層頭塔の石積手法 上層頭塔の石積は、下部の石と上部の石を直接噛み合わせることも支い石を用いることもせず、

石と石の間に土（粘土）を挟みこむ構造であることが、石積解体の過程で観察できた。こうした構造から想定できる工法は、一段目の石を置いた後、その上面に土を敷き均して填圧し、その上に二段目の石を載せるというものであろう。これは、他にあまり例を見ない工法であり、この点でも上層頭塔の特異性をうかがうことができる。なお、下層石積は上下の石を噛み合わせる工法を用いている。

3 遺物

Ⅱ期小礫敷の上面や上層頭塔積み土などから、軒瓦等が出土した（表7）。軒瓦は、1点を除いて東大寺のものと同範である。下層石積が上層頭塔と同様の塔をなし、そこにこれらの瓦を葺いていたものと見られる。また、Ⅱ期小礫敷上面を中心に、少量の土師器・須恵器片が出土した。

4 まとめ

今回の調査では、東面北半部での第237次調査と同様に、上層頭塔造営に先立つ下層石積とそれに伴うⅠ期石敷及びⅡ期小礫敷を検出した。この結果、下層石積が上層頭塔と同様に正方形の平面を持つことがさらに一層確実になった。

最後に、下層石積の規模を推定してまとめとしたい。北面におけるⅠ期石敷の東西長（外周石敷を除く）が25.5mであることは、第199次調査で既に明らかになっている。さらに、第237次及び今回の調査でⅠ期石敷の幅（外周石敷を除く）が1.95～2.00mであることが判明した。したがって、下層石積第一段の平面規模は一辺21.5～21.6m（72尺）の正方形と推定できる。これは、上層頭塔第一段の平面規模が一辺24.5m前後（82尺）の正方形と見られるのに対し、一辺の長さで2.9～3.0m（10尺）短いわけである。

（小野健吉）

表7 第247次調査出土瓦集計表

種別	型式	点数
軒丸瓦	6235M（東大寺と同範）	6
軒平瓦	6572（重郭文）	1
	6732F（東大寺と同範）	14
道具瓦	割り熨斗	13
	面戸	3

9 法華寺旧境内の調査 第242-6次

1 はじめに

本調査は、法華寺町内の住宅建設予定地の事前調査である。場所は昨年度の第234-5・15次調査で検出した金堂推定地の南東隣である。下層遺構として掘立柱建物1棟ほかを検出したが、これは法華寺の中枢部近くに位置する建物であり、その性格が注目される

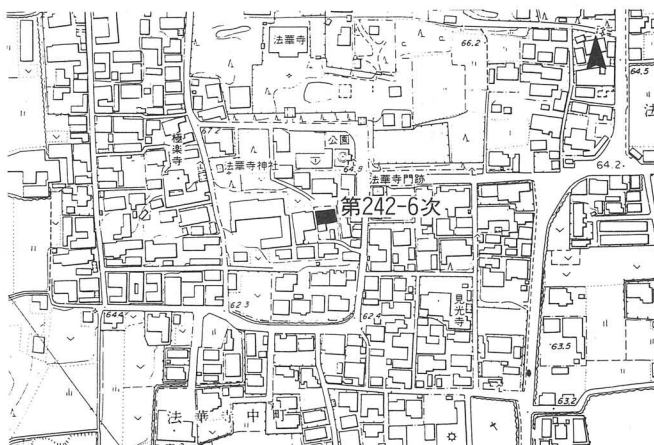


図49 第242-6次調査位置図 1:5000

とともに、柱痕跡が明瞭に検出できたので軸線の振れもほぼ確定できた。

2 基本層序

発掘区の西側では、地表から20cmで地山に達するが、東側では70cm下が地山である。これは法華寺が作られた舌状台地の南東部分に位置しているためである。床土の下には10cm前後の様に薄い地層があり、下層遺構を埋めているので、法華寺造営時の整地土と思われる。この面では遺構は全く検出されなかった。その下が古墳時代の遺物と地山の土を含む灰褐色砂質土であり、これが原地形に対してなされた最初の整地で、地山面に残る古墳時代の遺構に蓋をしていた。

3 遺構

奈良時代前期の遺構としては、発掘区北側で、桁行が7尺等間で4間以上、梁間が6尺で2間以上の、東西棟の掘立柱建物SB01を検出した。掘形は1m四方ほどで深さが80cm程度ある。うち東側の3個は柱痕跡を明瞭に残しており、この建物は東で北に振れる。また柱痕跡から測定した造営尺は30.7cmであった。その西にはSA02から04までの3本の南北柱列が検出されたが、いずれも掘形は小さく、塀・柵あるいは仮設建物のものと思われる。

4 遺物

おもに下層整地土から、6世紀を中心とした土師器の瓶の破片・埴輪・高杯などと、須恵器のほぼ完形の杯身セットや断面が赤茶色の瓶が出土したが、この地層には一部8世紀前半の土師器杯Aや須恵器の片口鉢も含まれていた。またSB01の東端掘立柱の掘形からは8世紀前半の杯Bが出土し、SA02の北柱穴からは平城宮土器Ⅲの須恵器杯Bが出土している。

5 まとめ

今回の発掘で確認されたこの地点の変遷をまとめておくと、まず6世紀頃の土器を多量に廃棄してあることから、そのころここは盛んに利用されていたと思われる。一部のトレンチで溝や土坑を確認したが、全体の様相は不明である。7世紀になると土器の量は極端に減り、生活の中心は他に移っていたと思われる。8世紀になると大規模な造成工事が入り、掘立柱建物が建設された。これを藤原不比等邸の時期に当てることがも可能である。そして天平勝宝以後、それらが廃棄され一様に整地が行われている。この面に遺構がみえないのは、法華寺金堂の前庭であったからだと推定される。

(藤田盟児)

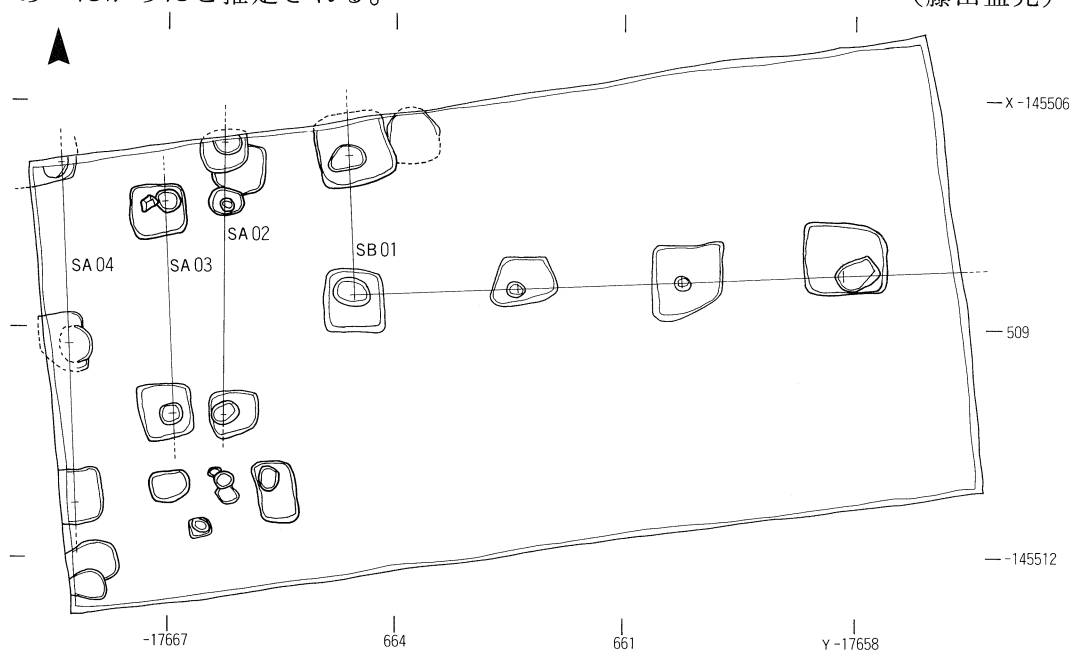


図50 第242-6次調査遺構図 1:100

10 薬師寺旧境内の調査 第242-7次

1 はじめに

薬師寺講堂薬師三尊像の修理用作業所の建設に伴い、建物予定地の事前調査を実施した。位置は、西僧房の北方約130mの地点で、平城京の条坊では、右京六条二坊十五坪にあたる。発掘面積は、80㎡である。

調査地は近年まで水田であったが、その後、駐車場用地への転用の際に、厚さ約70cmにおよぶ盛土が行われている。そのため、調査にあたっては、この盛土部分と水田耕土を重機により除去し、以下を人力掘削とした。

層 序 水田耕土は20cm程度の厚さがあり、その下は10~15cm厚の灰黒色砂質土となる。奈良時代から近世の瓦や土器、陶磁器片を多量に含む包含層であり、近世以降の水田耕土と考えられる。この層は、調査区全体に及んでおり、これを切り込む遺構は確認されなかった。その下は、厚さ60cm以上におよぶ青灰色細砂の地山である。古い時期の河川による均質の堆積物で、調査区の全域に広がっている。今回の遺構は、いずれもこの面で検出したものである。

2 遺 構

調査区の北部で、東西溝SD501を検出したほか、東南部で土坑SK502~504を検出したが、全体に遺構密度は低い。

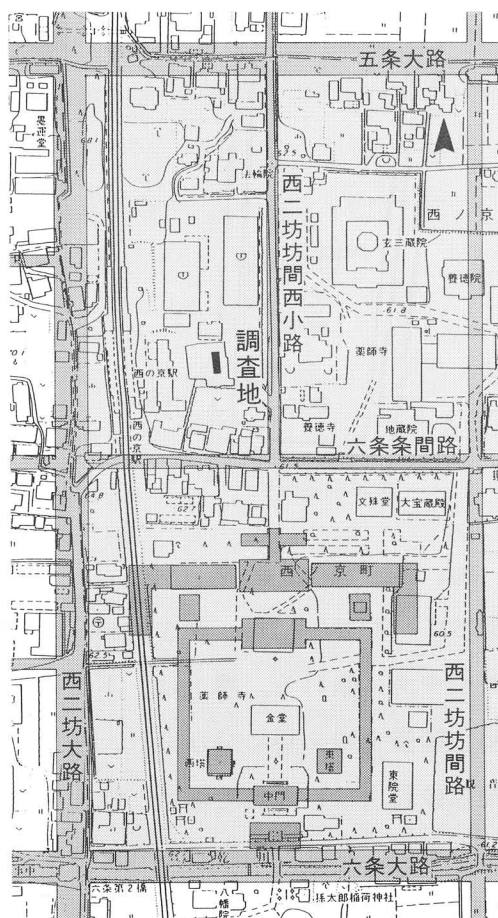


図51 第242-7次調査位置図 1:5000

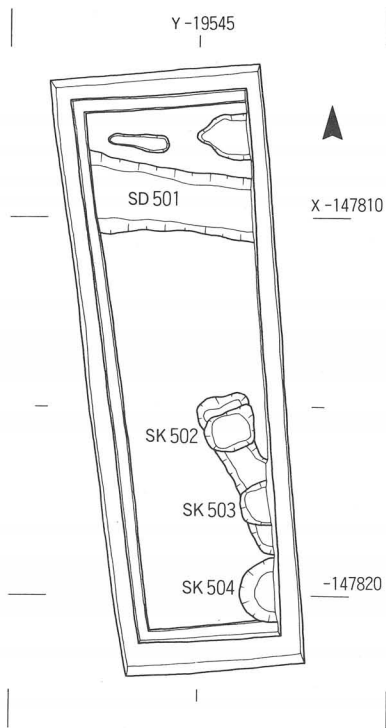


図52 242-7次調査遺構図 1:200

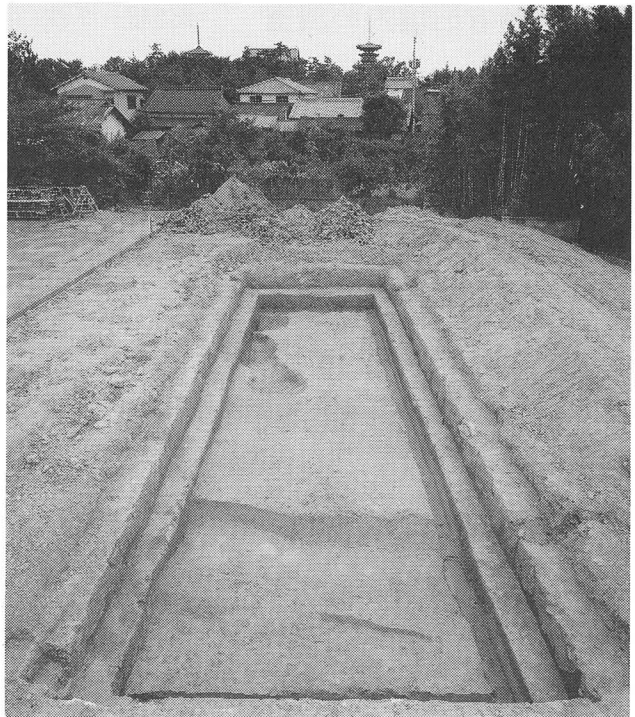


図53 第242-7次調査区全景 北から

SD501 幅1.7~2.1m、深さ約45cmの素掘り溝である。ほぼ東西方向であるが、東でやや南に振れる。埋土は、下から暗灰色粘土、暗灰黒色粘土、灰黒色粘土、黒褐色砂質土の4層に分けられ、前三者が自然堆積であるのに対して、最上層の黒褐色砂質土は、人為的堆積と考えられる。なお暗灰黒色粘土層は、厚さ10cm内外であるが、多量の遺物と木屑を含む。

SK502・SK503 塵芥廃棄用の不整形土坑である。深さ40~50cm、灰黒色粘質土に少量の青灰色細砂を交える。

SK504 同じく深さ約50cmの塵芥処理用の土坑であるが、平面形は円形に近い。埋土は、黒褐色の粘土混じり砂質土で、瓦を主体とする多量の遺物を含む。

3 遺物

瓦埴を主体として、土器・木製品・木簡などの遺物が出土している。年代は奈良時代から近世にわたるが、中世後期~近世前期の遺物が多い。奈良時代の遺物は、本来の遺構に伴うものではなく、新しい遺構や包含層に二次的に含まれるに

至ったものである。

瓦埴については、種類と数量を表に示す。軒丸瓦6276A－軒平瓦6641Gは、本薬師寺創建時の組合せであるが、平城薬師寺にも多数運ばれている。6304Eは平城薬師寺創建軒丸瓦である。軒平瓦6644Aは、長屋王邸で使用されている軒瓦で、同范品が平城京の内外のいくつかの場所で出土している。

表8 第242－7次調査出土瓦集計表

軒丸瓦			軒平瓦		
型式	種	点数	型式	種	点数
6276	A	1	6641	G	3
6304	E	2		?	1
	?	1	6644	A	1
型式不明		1	6689	?	1
中世		4	6702	G	1
			型式不明		2
			中世		2
軒丸瓦		9	軒平瓦		11
埴		丸瓦	平瓦		
重量	1.4kg	重量	89.5kg	重量	251.0kg
点数	2	点数	808	点数	2,466

土器は、須恵器・土師器・瓦器・中世陶器など、整理用木箱で3箱分が出土。また、SD501の暗灰黒色粘土層からは、木屑とともに下駄・盖板などの木製品と、2点の木簡が出土した。うち1点は「彦五郎」と読める近世木簡であるが、他は判読不能である。木製品としては、このほか包含層（灰黒色砂質土）から、檜扇の断片が出土している。

4 まとめ

今回の調査では、薬師寺の創建当初に溯る遺構は検出されなかった。これまでに行った数回の調査でも、伽藍主要部が置かれた右京六条二坊十一～十四坪内では、創建当初の遺構がかなりよく残っているのに対し、六条条間路を隔てた北側の九・十・十五・十六坪では、創建時の遺構がほとんど認められない。寺地の利用形態に、当初から差があったことを示すものであろう。

しかし、中世以降になると、今回検出した溝や土坑をはじめとして、この地域でも遺構が各所で検出されるようになる。当該時期の遺物も多く、子院として盛んに利用されていたことをうかがわせる。ただ、近世の子院の概要については、いくつかの古絵図によって知りうるとはいえ、発掘調査で確認した遺構はいまだ断片的であり、両者の整合を含めた具体的な変遷の追究や、全体像の解明は、将来に委ねたい。

(小沢 毅)

11 法華寺旧境内の調査 第242-11次

法華寺町横笛堂の南、同町東村中414-4で実施した住宅建て替えに伴う発掘調査である。調査期間は1993年11月15～26日、発掘面積は約36㎡である。

調査区の基本的な層序は、上から庭土（厚さ20～30cm）、遺物を含む整地土（褐色砂質土混じり暗灰色砂質土、厚さ10～20cm）があり、その下に地山（黄灰色砂質土）が堆積する。調査区南半部は、整地土層を掘り込む近現代の瓦を多く含んだ暗渠（厚さ40～50cm、瓦混じり暗灰色砂質土）により著しく攪乱されていた。そのため南半部の遺構は残っていないものと判断し、北半部についてのみ調査を行なった。遺構は地山面で検出した。検出面の標高は62.6～62.2mである。

北半部南西隅では柱根をもつ柱穴1個を検出したが調査区内ではまともらず、建物としては南または西に延びるものと考えられる。調査区北端で根石を伴う柱穴2個（柱間8尺）を検出、これは北か東へ延びるものと考えられる。この柱穴からは曲物底板、平安時代後半の瓦器が出土している。他に柱穴1個、鎌倉時代の土器を含む東西溝を検出している。以上のように、今回検出した遺構には奈良

時代のものとは確定できるものはない。

出土遺物のうち瓦では奈良時代の軒丸瓦1点（6316B）、軒平瓦6点（6663E・6667A・6721J各1点、6714A 2点、型式不明1点）、平安時代の軒丸瓦1点（7247A）などが出土している。土器では中世の羽釜、椀、小皿、近世の椀などが出土している。その他に埴輪2点がある。

（内田和伸）

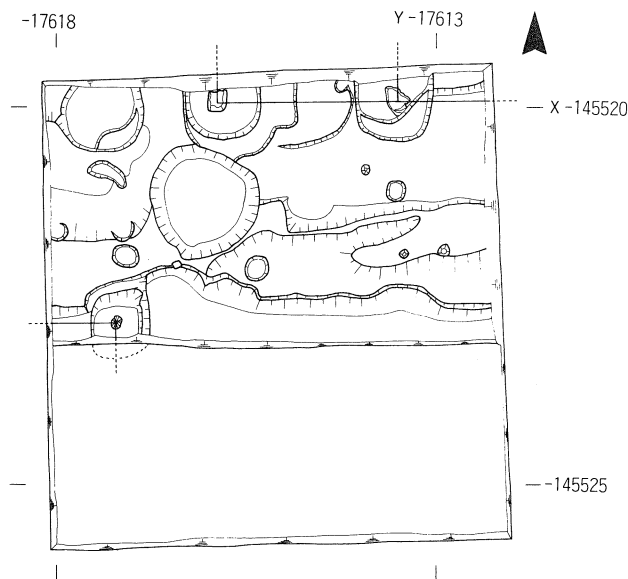


図54 第242-11次調査遺構図 1:100

12 西隆寺旧境内の調査 第242-12次

1 はじめに

ビル建設にともなう事前調査。西隆寺については、1970年代の発掘調査で金堂・塔跡や東門などを確認し、最近の調査によって東面・北面の回廊を検出するとともに、寺域東北地区の様相が判明し食堂院と考えている。また西隆寺造営前の奈良時代前半の掘立柱建物、さらに古墳時代や縄文時代の遺構も検出されている。

調査地は西隆寺の回廊内部で金堂の東南方にあたる。西隆寺伽藍の復元試案では、今回の調査区には南面回廊がかかることが予想された。そこで予定されている建築物の敷地面積のほとんどを調査することになり、遺構面近くまで機械掘削を行ない排土を外に搬出したあと、人力による遺構検出にかかった。まず、西隆寺造営にともなう整地面での遺構検出を行ない、記録作成後、北半・南半の2回に分けて整地土を除去し地山面での遺構検出を行なった。遺構の密度は、調査区南半の方が網密である。部分的に残る整地土上面の標高は71.45～71.60m、地山面の標高は71.30～71.50mである。調査地は旧秋篠川の氾濫原にあたり、地山面は砂層と粘土層が入り乱れ一様ではない。

2 遺 構

西隆寺の遺構 調査区南端で南面回廊の礎石据え付け掘形と思われる柱穴3個2間分を検出した(SC01)。柱間は10尺等間である。いずれも一辺1m強の隅丸方形状の平面で、暗茶褐色粘質土の埋土が5cm前後とごく浅く残るに過ぎない。さらに東では痕跡ほどの浅い凹みがあり、位置的には10尺となるが掘形かどうかは確かでない。西に続く部分では検出できなかった。こうした遺存状況は東面回廊部分と共通しており、基壇土はもちろん基壇の掘り込み地業も認められない。西隆寺の回廊については、桁行10尺で梁間8尺2間の複廊であることが判明している。東面と北面は確定しており、西面も中軸から折返しての想定は可能である。これらの成果を承けて南面についても復元を行なっている。今回の検出位置と柱間はこれに合致するもので、想定が妥当であることが裏付けられた(図55)。

東南方の土坑SK01は、平城宮土器Ⅳまでの遺物と瓦類が出土しているが、鉄釘・かすがい・鉄鏃とともに砥石が出土しており、西隆寺造営にともなう廃棄物を捨てた土坑であることも考えられる。なお、西隆寺廃絶後の遺構として、瓦溜まり8箇所(SX01～08)があり、10点ほどの軒瓦を含む瓦類が出土した。

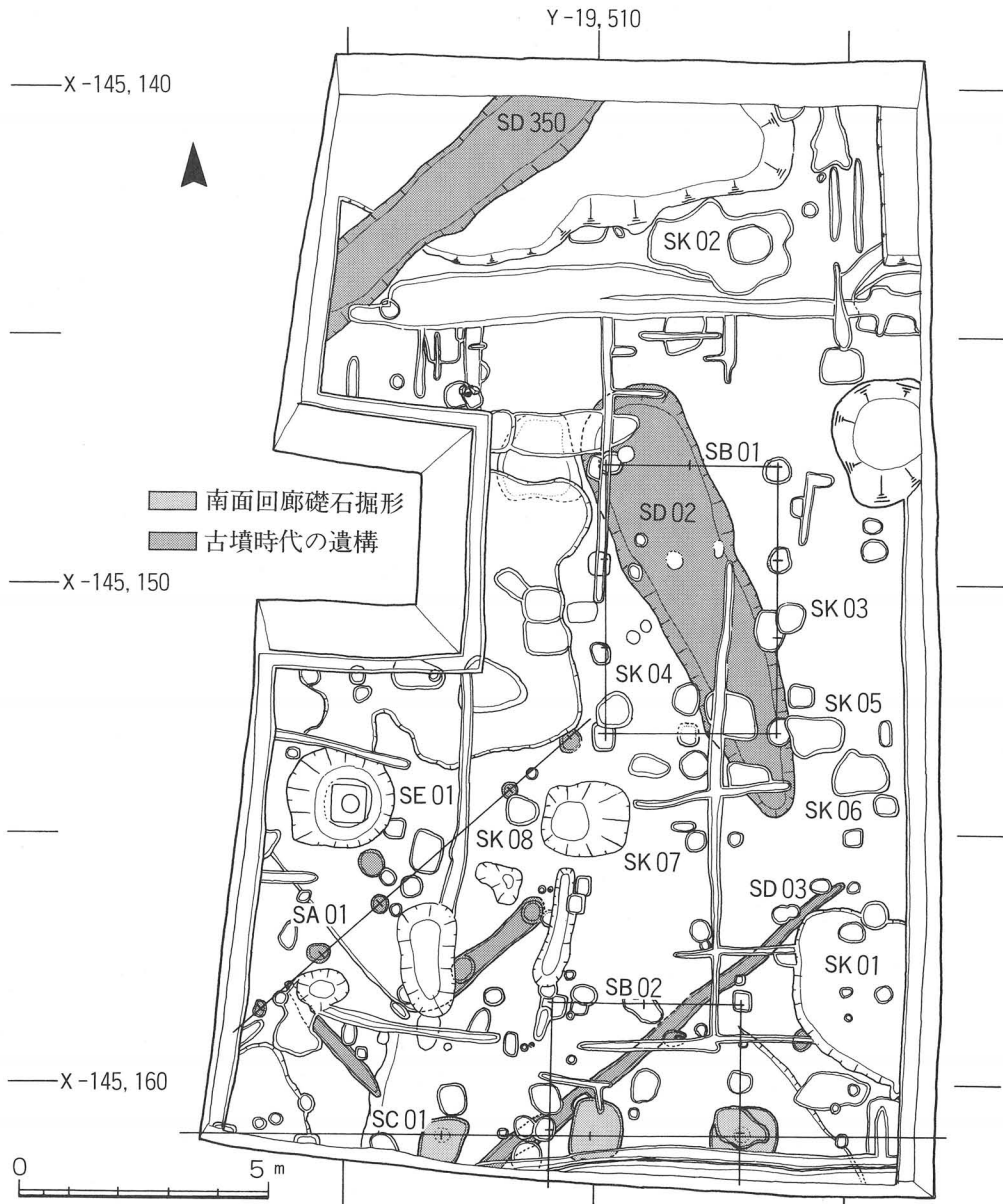


図55 第242-12次調査遺構図 1:150

奈良時代前半の遺構 神護景雲元年(767)頃に始まる西隆寺造営前の遺構である。平城京条坊の右京一条二坊十坪にあたる。南北棟の掘立柱建物SB01と02がある。SB01は桁行3間(6尺等間)×梁間2間(6尺等間)で、東北・西北隅の柱穴には、径10数cmの柱根が遺存していた。SB02は梁間2間(約7尺等間)で桁行1間分(8尺)を検出した。井戸SE01は、井戸枠がほとんど抜き取られ、わずかに一枚の縦板が残るに過ぎなかった。掘形は径2m強の円形で、井戸枠は一辺70cmほどに復元できる。底には径30cmほどの曲物を据えていた。井戸からは埋土・掘形ともに多くの遺物が出土しており、土器は平城宮土器Ⅲまでのものでおさまる。軒平瓦6665A・6721Cが各1点出土している。

古墳時代の遺構 第209次調査の斜行溝SD350の続きを7mにわたって検出した。幅2.5mで深さは0.5m。土師器小片と埴輪小片が出土した。かつて6世紀の土器が出土しており、水田にかかわる灌漑用の溝と考えられている。この溝はほぼ埋没したのちに、調査区西北隅までを含む幅の広い溝として掘り直されている。

古墳時代の遺構は、この斜行溝の方向ないし、これに直交する方向性をもつ。斜行溝SD02は、最大幅2.3mで9mにわたって検出した。深さは20cmほどの浅いもので、布留式土器が出土している。また調査区南半では、断面V字に近い幅30cmで深さ30cmの細溝SD03がある。また柵列SA01も、SD03とほぼ並行する方向をもち、1.5mほどの間隔で柱穴がならぶ。SD03・SD04・SA01とも遺構の埋土は暗茶褐色土で共通している。

3 遺物(図56・表9)

軒丸瓦11点、軒平瓦14点が出土。これまで西隆寺から出土していない型式として軒丸瓦6151Aがある。回廊雨落溝は凝灰岩切石組とみられているが、瓦溜りから凝灰岩1片が出土した。土器は西隆寺造営後のものは少なく、多くは西隆寺以前の奈良時代前半のものである。このうちSE01から出土した大型の蹄脚硯を図示しておく。

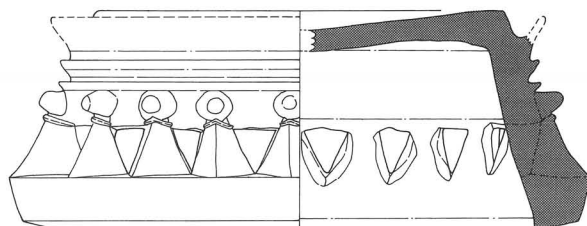
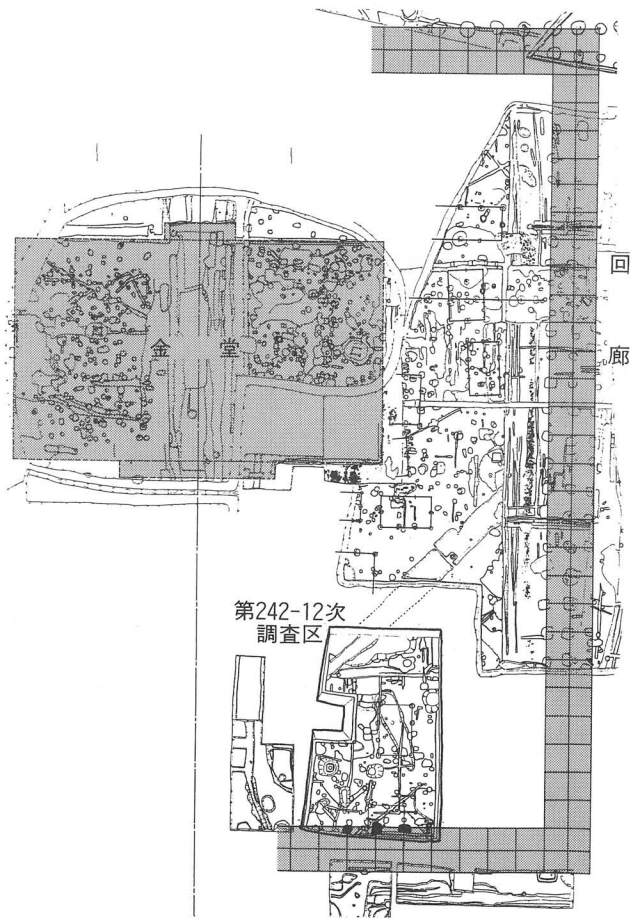


図56 井戸SE01出土の蹄脚硯 1:4

4 まとめ

西隆寺の南面回廊について、ほぼ想定した位置で礎石掘形と思われる掘り込みを確認した。北側柱列に相当するものとみてよいだろう（図57）。ただし、今回の調査地点の南側で1970年代に調査を実施した際には、南面回廊の南側柱列を検出していない。むしろ礎石掘形の底がわずかに残る遺存状況から考えると、既に消失していることも十分に考えられる。今後、中門を含めて複廊である回廊部分全体にかかる調査によって、南面回廊の位置を確定することが課題である。



このほかに、奈良時代前半については、周囲の調査区と同様に、桁行3間で梁間2間の小規模な掘立柱建物があったことを確かめた。

(岸本直文)

図57 西隆寺金堂と回廊 1:800

表9 第242-12次調査出土瓦集計表

軒丸瓦		計10点		軒平瓦		計14点		丸瓦	埴
型式種	点数	型式種	点数	型式種	点数	型式種	点数	64.7kg 547点	2.8kg 3点
6133 O	1	6235 ?	1	6664 C	1	6761 A	3	平瓦	凝灰岩
6151 A	1	6236 A	1	6665 A	1	A ?	1		
6235 C	1	6236 D	1	6691 A	2	6764 A ?	1	261.4kg 2,184点	0.1kg 1点
C ?	1	型式不明	2	6721 C	1	6775 A	1		
6235 I	1			6727 B	1	型式不明	2		

13 法華寺旧境内の調査 第242-15次

本調査は住宅建て替えに伴う調査で、場所は推定法華寺旧境内の東端部に位置する。この敷地内では既に第112-10次調査として、発掘を行った地域がある。調査は南北5.5m、東西8mのトレンチを設定し、44㎡について行った。土層々序は、40～60cmの厚さの盛土が最上層にあり、その下に茶褐色混じり暗褐色土が10～30cm、暗褐色土が15～30cmの厚さに堆積しており、その下は黄灰色粘土（部分的には青灰色細砂質土）の地山面となる。暗褐色土層には土器・瓦が多量に含まれ、これが遺物包含層で、遺構はこの下面で柱穴数個や土坑・落込みなどを検出した。調査区西部の土坑SK01・02は平面では2つの遺構となっているが、西壁断面の所見では、その下部では現地表面から150cm以上の深さにヘドロ状の灰黒色粘土が堆積した、池状の落込みとなって調査区からさらに西へ延びる。土坑SK03も同様の堆積を持ち、深さは現地表面から約170cmであり、大きな石が据えられていた。以上の土坑はいずれも地山面を掘り込んだもので、多数の瓦・土器

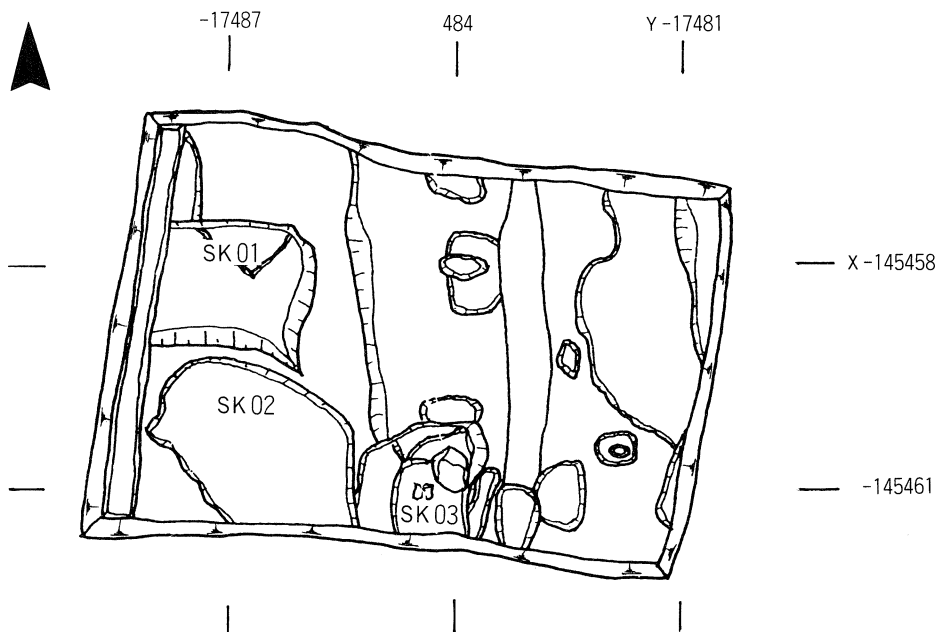


図58 第242-15次調査遺構図 1:100

が出土しているが、奈良時代のものと後世のものが混じっており、瓦・土器を廃棄した土坑と考えられる。調査区中央部のやや北寄りの掘形と柱抜取穴を持つ柱穴は地山面上で検出したもので、奈良時代の遺構と考えられるが、関連する柱穴を検出することはできなかった。現存の掘形の深さは約40cmである。

遺物は暗褐色土や土坑から多量の瓦・土器が出土した。年代としては奈良時代初期のものから中・近世のものまで、区々であるが、この地域の奈良時代の様相を考える上では、軒丸瓦6284A型式、軒平瓦6671A型式の出土が特筆されよう。前者は平城宮第Ⅱ期あるいはそれ以前に遡る瓦、後者は興福寺創建の瓦とされている。法華寺は『続日本紀』天平17年（745）5月戊辰（11日）条に「旧の皇后宮を宮寺となす」とあり、光明皇后の皇后宮を全国の総国分尼寺法華寺としたものである。さらに遡れば光明皇后の父藤原不比等の邸宅であり、興福寺は彼の創建にかかる。したがってこれらの瓦はこの地域が法華寺及びその前身の藤原不比等邸宅との関連を有した地であることを示すものであり、その出土は極めて重要な知見となる。その他、注目すべきものとして、唐草文縁の新型式の軒丸瓦（図59）や藤原宮式軒丸瓦6275Mの完形品などがある。土坑SK02出土の新型式の軒丸瓦は、大型の軒丸瓦の外区片ではあるが、外縁は傾斜線Ⅰ、上面には興福寺創建時の軒丸瓦6301A型式同様に、1条の凹線がめぐり、斜面には興福寺創建時の軒平瓦6671A型式に類似した2葉構成の唐草文を右回りに展開させるという特徴を持つものである。この瓦の出土はこの地域の藤原不比等邸宅との関連を補強する材料となるろう。



図59 SK02出土軒丸瓦 1:1

法華寺及びその前身の藤原不比等邸との関連について考察材料を得た点で、今回の調査は意義のあるものと言えよう。ただ、その全体的な検討はさらなる発掘知見の増加を俟て行うべきものと思われ、この地域の今後の調査が期待される。（森 公章）

14 西大寺旧境内の調査 第242-19次

1 はじめに

共同住宅建設に伴う事前調査である。調査区域は西大寺旧境内、創建時の伽藍中心部の北東に当り、想定される伽藍中心軸からは東へ約70mに位置する。調査区は当初、敷地面積456㎡のうち中央東寄りに東西約8m、南北約15mを設定したが、調査区西半で建物基壇と南北に連なる礎石抜き穴及び根石1列を検出したため、一旦埋め戻し、西方へ約4m拡張して再発掘した。拡張区でも基壇が連続し、礎石抜き穴等が検出された。更に柱列延長に小トレンチ5箇所を設けて柱列の確認に努めた。調査面積は187㎡、調査期間は1994年3月8～30日である。

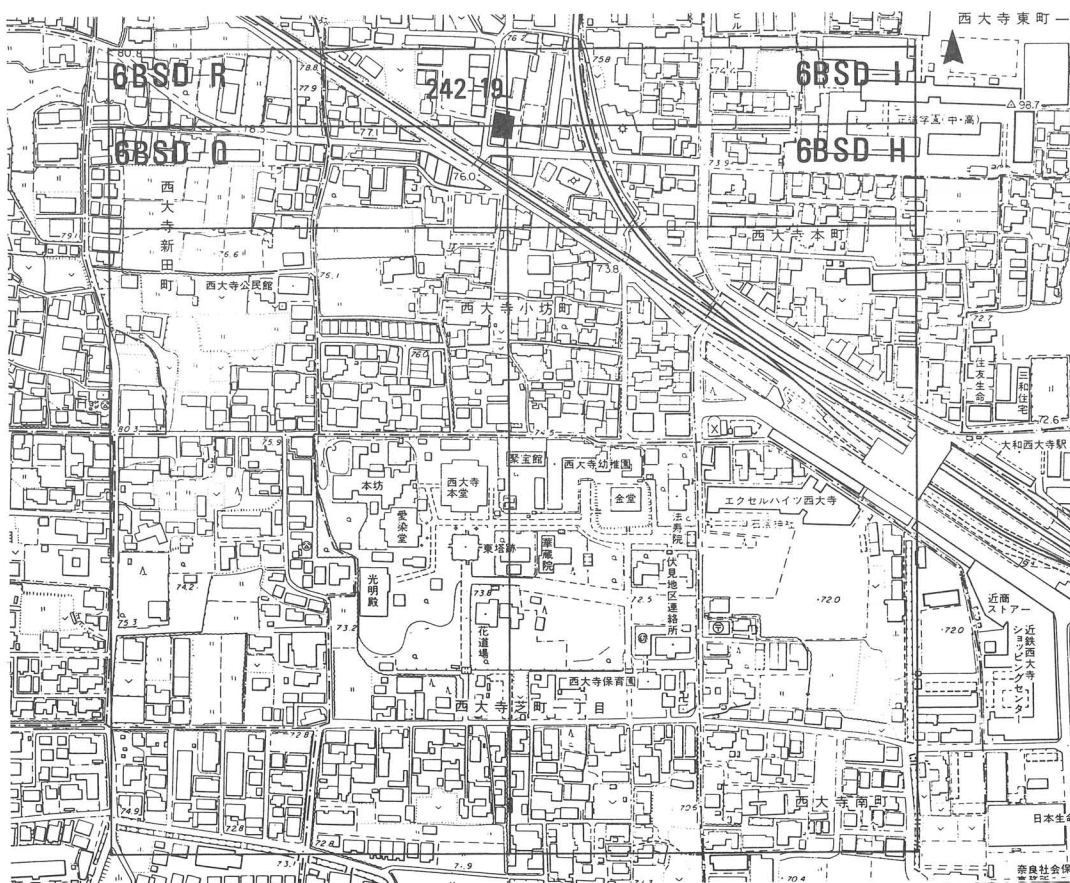


図60 第242-19次調査位置図 1:5000

2 遺 構

調査区の基本層序は上から、現代の整地土、耕土、床土、整地土（遺物包含層、中世）で遺構面に達する（地表面から60～100cm）。調査区東半では整地土が20～30cmあり、その下が黄色砂質土の地山となる。調査区西半は南から北西へ地山が高まる。調査区南端では60cmほどの整地土の下が黄色砂質土の地山（地表面から110～140cm）だが、地山の高まりに従って整地土が薄くなり、調査区北半は地山直上が中世の整地土となる。調査区北西端では、地山は地表面から80cmであった。

基壇建物SB01 調査区西半で建物基壇の高まりを検出した。南北方向で18.7m分あるが、南北とも更に連続する。東西方向は約9m分を検出したが調査区西端で南北溝SD06に攪乱され、それより西の状況は不明である。基壇の造成は地山の高まりに従って南北で異なっている。地山の低い南半では掘込地業SX03を行なった後、基壇を築成している。掘込地業の深さは基壇東側の整地土上面から50cmほど、基壇の高まりは同じく整地土上面から30cm程度が遺存していた。基壇築成土は数層をなし、下層は黄褐色土または赤褐色土、上層は灰緑色粘質土または黄灰色粘質土であるが、各層界面は凹凸が著しい。南北溝SD02は基壇化粧抜取痕跡と見られる。これに対し地山の高い北半では地山を削り出して基壇としている。基壇化粧抜取痕跡は検出されなかったが、調査区北端で南側の基壇上層築成土と同質の土が一部に残り、一連の遺構と考えられる。

基壇上では柱礎石の据付掘形、抜取穴、または根石が検出され、南北4間分、東西2間分が確認できた。柱間寸法は南北が南から12尺、9尺、15尺、12尺、東西が13尺で、基壇の出は東側に6尺、東西棟の建物と考えられる。ただし9尺と15尺の柱間の部分は遺構の残りが悪く、12尺等間の可能性もある。また東から3列目は南北溝SD06の攪乱により、礎石据付掘形のみを検出した。東から2列目の柱列を南へ延長した小トレンチでは柱は確認できず、遺構は建物東南端と想定される。しかし、基壇土は更に南へ続き、基壇を共有する建物が存在する可能性がある。

その他の遺構 基壇より東側には中近世の柱穴がいくつか検出されたが、建物としてはまとまらなかった。基壇東端にかかるSE04、SE05は近世の野井戸である。

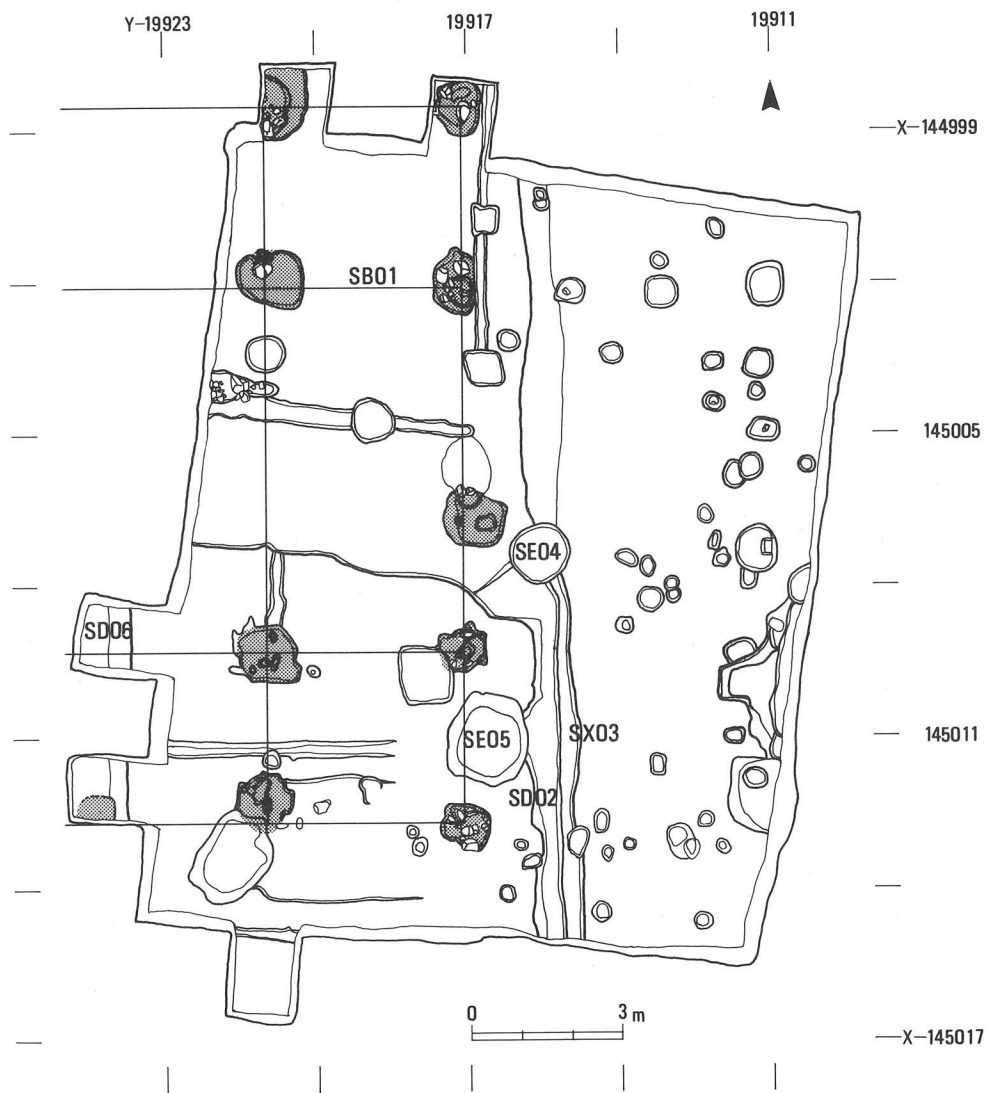


図61 第242-19次調査遺構図 1:150

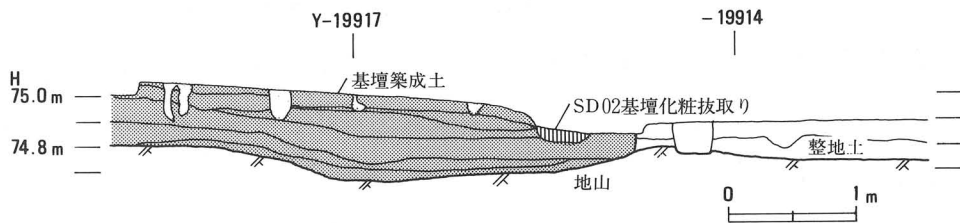


図62 建物基壇断面図 (X = -145,014地点) 1:60

表10 第242-19次調査出土瓦集計表

軒丸瓦		軒平瓦				文字瓦		凝灰岩		丸瓦	
形式種	点数	形式種	点数	形式種	点数	刻印「十」	1	重量	2.5kg	重量	171.3kg
6133 S ?	1	6732 K	3	形式不明	1	刻印平「大」	1	点数	9	点数	912
6125 A	1	6732 Q	2	中世	1	刻印平「中」	1	埵		平瓦	
6236 A	1	6732 R	1	近世	1	その他		重量	20.6kg	重量	630.3kg
6236 I	1	6732 ?	1			瓦製円板	1	点数	15	点数	4,313

3 遺物

瓦は、基壇掘込地業内から軒丸瓦6133S?（8世紀後半）が出土した。このほか遺構面より上の新しい整地土層からは、西大寺創建の軒丸瓦と軒平瓦や、中世の軒平瓦が出土している。詳細は出土瓦集計表に示すとおりである。

土器は、基壇掘込地業から須恵器鉄鉢（8世紀前半）、須恵器杯A（8世紀後半）などが出土した。また基壇建物SB01の礎石抜取穴から、中世の羽釜などが出土している。建物基壇の上層築成土（粘質土）は円筒埴輪、楕形埴輪、形象埴輪などの埴輪片を含んでおり、古墳の土を採取して用いたものらしい。遺構面より上の新しい整地土層は9～11世紀の土器片を多く含み、9世紀後半の緑釉陶器椀片（京都産）、11世紀の山茶椀片（東濃産）も出土した。

4 まとめ

基壇建物SB01は、遺物の出土状況から、奈良時代に創建され、中世に廃絶したものとみられ、西大寺関連の建物と考えられる。しかし、調査区周辺はこれまで発掘調査が乏しく、また調査面積の限られた今回の発掘のみで、遺構の性格を確定することはできなかった。しかし、SB01が基壇をもつ建物であることは、西大寺伽藍において、主要な建物の一つであったことを意味している。ここでは遺構から想定される建物について若干の考察を試み、周辺調査の成果を待ちたい。

食堂院築地塀の門 西大寺伽藍について最も詳しい復元案は、宮本長二郎「奈良時代における大安寺・西大寺の造営」(古寺美術全集『西大寺と奈良の古寺』1983年1月) 所載の復元配置図に示されている。

この復元図に今回の発掘区を重ね合わせると、伽藍北東の食堂院の西側を区画する南北方向の築地塀に当たる。今回検出された基壇建物SB01を、この築地塀

に開く食堂院の門とするなら、南北柱間が4間分で48尺という規模からは、正門を想定すべきであろう。とすると食堂院は西入りの配置となり、復元案と合致しない。また食堂院内の他の建物とするには伽藍中心軸に近すぎるように思われる。

廻廊 伽藍内の基壇建物としては廻廊を想定することもできる。この場合、遺構の南北方向の柱間寸法は12尺の等間であったろう。西大寺には薬師金堂、弥勒金堂の二つの金堂があるが、講堂はなく、弥勒金堂が他の古代寺院の講堂に相当する位置にあるとされている。しかし、今回の発掘区は西大寺伽藍中心部の北東、旧境内北端に近くに位置する。金堂院の廻廊については、『西大寺資財流記帳』の「双廊一周 一百十七丈二尺 東西各軒廊」から、一周1172尺と知られる。この廻廊が薬師金堂と弥勒金堂に取り付くことはあっても、弥勒金堂の北方まで延びるとは考えにくい。一周の長さに二つの金堂、中門、東西脇門などの長さを加えて総延長としても、廻廊は今回の発掘区までは達しない。金堂院全体を北寄りに再設定しないかぎり、SB01を廻廊と比定するのは難しいようである。

僧房 西大寺伽藍に関する史料として、『西大寺伽藍絵図』（西大寺蔵）がある。これには弥勒金堂を囲んで「北室」、「東室」、「西室」が描かれ、三面僧房とみることができる。今回の調査区を『伽藍絵図』に当てはめると、北室（北面僧房）の東端付近に位置するようである。元禄11年作成のこの絵図は「以宝亀十一年十二月二十九日絵図流記謹模写之者也」の墨書をもつが、疑問点も多く、宝亀年間の西大寺伽藍を正確に表わすものではないと考えられている。この『伽藍絵図』だけを根拠にして、遺構の性格を定めるのは難しい。

ところで、宝亀11年の完成とされる『西大寺資財流記帳』にみえる僧房は、十一面堂院の檜皮葺4棟、四王院の瓦葺1棟と檜皮葺4棟、小塔院の檜皮葺2棟の計11棟で、その面積は薬師金堂と弥勒金堂を合わせた面積にほぼ等しい。東大寺、興福寺、薬師寺、元興寺、大安寺などの奈良の大寺には、いずれも三面僧房があり、その面積は、金堂と講堂の合計面積の2.6~4.9倍に達する。単純な面積の比較であるが、『資財流記帳』の僧房だけでは面積が過小に思える。『資財流記帳』に記載されない三面僧房が存在した可能性もあるのではなかろうか。（長尾 充）